海老名彦正著

家の福吉

新人社發行

「勝利の福音」序

吾人の衷心に抑壓せんと欲して、尙抑壓すべからざる一種の靈能を感ずるものあるは何ぞや。淺く考ふれば、この靈能は天外より吾人を征服せんとて襲ひ來る權力なるが如く思惟せらるれども、深く其眞相を察すれば、外界より來る怪異の能力にあらずして、乃ち吾人の衷心に勃然として發生する新生命の能力なるや疑を容るべかず。此生命を有する者にして誰れか此新なる能力によりて其人格の改造せられつゝあるを實驗せざらんや。各自の人格を改造し得るこ

の能力は、更に進んで社會をも國家をも改造し得べきものあるは亦自然の勢といふべし。今此の新なる人格を有する人々の團體が國家に於ける地位の如きは、吾人亦何の言葉を以て之を言明し得べきかを知らざれども、吾人は先づ Inner life of New Japan といふを以て最も適當なりと信ずるなり。或は Empire within Empire 又は日本の日本ともいふべきか、兎も角も靈能の幸ちはふ我邦の中に於て新萠芽を發し來る新日本の生命たるや論を待たざるべし。新日本の生命は新帝國を建設する勝利の能力たらずんはあるべからず。」支那印度のクリスチャンが考ふる所を察するに、基督を尊信するは故國在來の宗教を棄てゝ文明國の宗教を信奉し、同胞の仲間を離れて歐米人と調子を一にする團體に加入するかの如く、自からも思ひ、又人々にもしかく思はせたりしが。吾人の考へとは天地隔絶するものあるなり。吾人は自覺す、二千六百年の歴史を有する日本民族が精神上の一大進化をなさんとするに際し、率先して其前驅となりしものは、則ち吾黨クリスチャンの團體なりと。我黨の素地は二千六百年間祖先の衷心に存したるなり。之れは天地を主宰し、人類を指導する神靈の翼下に暖められて、今や卵殼を破り孵りて來るものなれば、そが則

ち新日本のinner lifeそのものにして、帝國の中に新帝國を形成せんとするは多言を要せずして明なり。

吾人が自覺する靈能は果して勝利の福音なるやは容易に知り得べき所なり。今や世の中は腐敗して混亂汚濁の社會となり果てたりとは、天下一般の叫ぶ所、然かして社會それ自身も實際にしかく感じて亡國論を絶叫しつゝある其際に、吾人の衷心には却て健全の狀態を自覺し、帝國の旺盛を豫想し、滔々たる世の腐敗に對し、寧ろ勝利を制し得るの確信は年月と共に增長しつゝあるなり。假令外なる日本は腐敗するとも、内なる日本は日々に發達生長しつゝありとは、則ち吾人の自覺する所、腐敗をして腐敗を葬らしめよ、蓋し腐敗するものは腐敗すべき運命を有するものなれば、若しそが腐敗するとなからんか、社會は何時までも舊態を保ち、終に枯稿して進化することは能はざればなり。腐敗せずんば則ち稿枯し、枯稿せずんば則ち腐敗す。是れ現時社會の兩面なり。吾人の衷心に躍如たる靈能の作用とは全く其性質を異にす。吾人が世人と口調を同くして日本の現狀に對し、悲觀の聲を發せざるは、則ち吾人の衷心に勝利の福音が侃々として其樂觀を教示するものあるが故なり。

勝利の福音は老人も之を聞ひて歡喜せざるにはあらざれども、其最も之を歡迎するものは青年學生ならざるべからず。吾人は老人の數を以てすれば、佛教其他の宗教に及ばざるに相違なしと雖も、青年學生を以てすれば、優るとも決して劣らざるなり。舊日本には吾々クリスチャンは勢力乏しきものなりと雖も、將來を有する青年學生は多く吾黨のものにあらずや。彼等昔時は學校に於て又友人間に於て有形無形の壓制を受けたれば、クリスチャンの家庭にて發揮せられたる信仰も、安息日學校に於て煥發せられたる信仰も、中學に入り、高等學校に入り、又進んて大學に入るときは、其光輝を奪はれ、全く冷却し盡して、一般並みの無宗教者となり果つること決して少からざりき。僅にミッション學校に入りて室咲の花となるにあらざれは、生長すること能はざりしなり。それとても社會の冷風に遇ふときは忽ち凋落して見るに堪へざるものとなるは珍からざりき今は則ち然らず。一方より見れば、ミッション學校は其勢力極めて少なく、年を追ふて衰頽の悲運に陥りつゝあれども、又眼を他の一方に放ちて考ふれば、官立の諸學校は我黨の主義に其門戸を開放し、我黨の主張を歡迎するに至りたるが如きは前代未聞の事

といふべし。昔時は學校に入りたるが爲に信仰を失ひたりしが、今時は學校に於て信仰を發揮し、クリスチャンとなるもの甚だ少しとせず。時勢は吾人と逆比例をなして進行するにあらず、始より吾人を乘じつゝありしなり。近時に至りて、頓に吾人を驅りて其渦中に投せんとす、クリスチャンたるもの亦反省せざるべからず。吾人は我黨の主張が勝利の福音たるを徵して、益吾人の意を强うせざるを得んや。然りと雖もクリスチャンの主張は强ちに皆勝利の福音にはあらざるなり。彼等の主張は其眞髓に於ては異なる所なく、齊しく勝利の福音なれども、或は信

條を主張し或は儀式を主張するもの甚だ少しとせず。浸禮の儀式を主張し、第七日安息を主張するが如きは、吾人が基督教其ものと認めざる所、斯る主張が社會を征服するの能力あると信ずるは妄信の至りにあらずして何ぞや。其他使徒繼承の聖式を主張するが如きも、古代の習俗を傳承するものにして一顧の價すらなきものなり。然かして亦聖書万能を主張し、奇跡の史的事實を證明し、三位一体の教義を論辯するが如き、到底勝利の福音にあらざるべし。其他種々の贖罪論の如き、肉體復活の如きは科學旺盛の社會を支配すべからざるや多言を要せずして明なり。

斯の如き教義や儀式は吾人の所謂勝利の福音にはあらざるなり。且又是等の儀式信條を評論批判するを以て基督教の宣傳の如く心得るは亦吾人と全く主義を異にするものなり。然らば則ち勝利の福音とは何ぞや。吾人が勝利の福音といふは、則ち歴史ありて以來數千年の久しき、人類靈化の能力たりし聖靈の聲なり。此靈は則ち光明の靈、則ち正義の靈、則ち博愛の靈、則ち敬虔の靈なり。此如きは固より天下に敵なきもの、吾人が勝利の福音とするも亦宜ならずとせんや。光明は暗黑と戰ひ、生命は死亡と戰ひ、博愛は怨憎と戰ひ、正義は罪惡と戰ひ、敬虔は悖戻と戰ふ。此戰爭は人類の起原と偕に開始せられ、壯烈慘憎の歴史を作りつゝ、百年は百年よりも千年は千年よりも、より多くの勝利を光明の祭壇に獻じつゝあるは、吾人の信じて疑はざる所なり。吾人は公道仁義の此信念が新帝國の生命にして、舊帝國の中に生長發達しつゝあるを觀る。よし爾は腐敗をもて此帝國を破壞するあらんも、我は三日の後に新帝國を建設すべしとは則ち勝利の福音なり。勝利の福音は實驗上の福音なり。吾人之を聞くこと三十年、然かして其吾人を欺かざるを知る。故に之を我敬愛する同胞に頒たんと欲すとしかいふ。

明治三十六年七月上浣

東京小石川の寓居に於て

海老名彈正

目次

新武士道……一
所謂武士道の今昔——新武士道——士の資格

士の宗教……一七
士と宗教と——士の宗教

靈的生命の勝利……三〇
基督教の世界觀——基督の煥發せる生命——靈的生命の勝利

天眞の聲……四三
光の源を慕ふの聲——同情の聲

神の顯現……五七
神人の呼應——物力の神——審判の神——道義の神——至愛の神——基督に於ける最高の顯現

基督觀（其一）……七四

基督イエスの基督觀――耶蘇基督は何ものぞや――耶蘇自身の基督觀――基督は吾人の生ける救主也

基督觀（其二）……九〇

基督の神性――基督は人也――基督の神性を論ずる所以――基督の道德的品格――父なる神の意識――基督の人格と吾人の修養

基督復活の意義……一〇八

復活問題の必要――復活なる觀念の基礎――基督の復活――復活の內容

神殿とは何ぞや……一二五

天然の裡に神を拜せしこと――國家のうちに神を感ぜしこと――一個人即神殿の自覺――人格的生命の神殿

聖オーゴスチンの信念……一四一

彼の父母――遊學と墮落――マニキー教――羅馬に行く――モニカ兒を追うて羅馬にいたる――靈性の苦悶――豁然として光明の域に入る――ナ氏宗教的實驗の大畧――彼の見出したる救の神――性惡論――惡による罪の救――現代の青年に警告す

附錄

大哲フィヒテー……一七八

彼の幼時――彼の學校時代――彼の壯時――彼の晩年――今日の日本とフィヒテー

シユライエルマッヘル……一九八

彼の生れたる時勢――彼の受けたる教育――彼の壯時――結婚――婚後に於ける事業――彼の人物

了

勝利の福音

新武士道

所謂武士道の今昔

武士道は是れ神ながらの道

近頃世の腐敗に反動して、武士道の復興を講ずるもの多く、之に關し坊間書籍の出版せらるゝもまた少なくない。其說を聞き其書を繙くに、佛敎家は佛敎を以て武士道の旨趣とし、儒者は儒敎を以て其の本體とし、國學者神道家は、武士道はこれ神ながらの道なりと主張す。此等の說各一理ある。されど詮じ來れば、武士道は是れ神ながらの道といふもの、尤も其眞を穿てりといふべきである。佛敎及儒敎が、斯道を明にするに於て、少なからざる益を與へたることは疑ないけれども、これ畢竟他山の石たるに過ぎないで、其玉た

吾人の武士道

るものは即ち我民族の精神たる大和魂に外ならない。武士道が暹羅安南、印度に發揮せられずして、却て此の極東の日本に生じたのを見れば、其佛教固有のものたらざること明であり、支那に著しからずして日本に勃興したるを見れば、其の儒教固有のものたらざるをまた了すべきである。しかり而して佛教家は之を磨くに徹頭徹尾佛教を以てし、儒者は亦飽くまで其教に由りて之れを琢いた。こは然るべきことてまた斯道に貢献するところ甚だ多くあつたのである。しかし之を琢磨したものは日本人である、日本人が日本人の魂を磨いたのである。しかして儒者や佛者が今日斯く武士道に就て論ずる權利あらば吾人日本人たるクリスチャンにも亦此權利ない筈はない。然り大にある。吾人は吾人の信ずる道を以て大和魂を磨かうとする。而して新なる光明のうちに必ず發揮せらるゝものあるを信ずる。武士は日本人の粹の粹である。花は櫻よ人は武士と歌はれて國粹を

武士は日本の粹

武士道の國民的普及

代表したものは、蓋し日本人の尚武の性に基く。猶ユダヤ人の理想が預言者として躰現し、希臘の人が哲學者として躰現し、ローマは政治家に印度は行者に之を代表せしめたるのと同樣である。

されど武士といへば國民一般を代表するものにあらず、則ち一部の階級なり。されど之を推擴めていふ時は、上は一天子より下は賤か伏家の匹夫匹婦に至るまで皆一個の武士たるところがある。又特り男子のみでない、女子といへども武士の妻武士の女といひて、則ち自ら武士たるところを持して居た。況んや維新の革命により士農工商の墻は毀たれて四民平等となり、男女の差別の觀念は斥けられて其同權は認めらるゝに至りたれば、古へ少數者の間にありし武士道は今後一般に普及しなければならぬ。

しかるに其實際は如何。吾人は嘆いた、維新の革命により武士が武士を殺しゝを見ては、一時嘆かざるをになかつた。嗚呼維新の革命、

吾人はこれを世界史上の一異象とする。この時平民興つて平等を主張し差別を破壞したのではなく、武士自ら其特權を拋ち其自己を棄てゝ之を犧牲に供したのである。眞に一偉象、我れ茲に櫻花魂の美と潔とを見る、されど悲哉武士の廢ると共に武士の精神も共に失せて、其農となり商となり工となるや所謂素町人根性の浸蝕するところとなり了せうとする。予はいうた武士は自ら武士を殺して之れを平民の祭壇にさゝげたと。しかれども眞の犧牲はそれ限りに滅するものでない。イエス宣はく一粒の麥もし死なずば其儘にてあらん、もし地に落ちて朽ちなば之に由つて多くの實を結ばんと。見給へ、基督の犧牲は多くの基督即ち基督信者を造らんが爲めであつたとを。もし王政維新の平等が、美はしき花を散らし枯らして、たゞ一樣に野邊の醜草の莽々たるに歸せしめしに止まらば、この平等やわれはむしろ無かつたことを希うたであらう。若ししからずして、士たるものが農となり商となりて彼等の中に沒し、彼等を擧げて古への武士の地位に到らしめ、四千萬の同胞をしてひとしく國粹の美を發揮せしめんとせしならんには、今日の如き腐敗は見なかつたであらう。

併し彼等は此覺悟を有たなかつた。

遮莫、神の此民を惠むや茲に二千六百年、日本國を以て歷史ある國となし、發達生長ある國としたまひし其神は、必ずや維新の革命に附するにこの意義を以てしたまひしこと、疑ふべきでない。これをクリスチャンの見地に照し來れば歷々として其跡を見るのである。武士が永久に日本の國粹たるべきや否やは疑問である。されど武の精神に至つては社會の各方面に働きて其國粹たる所を保つべきである。武士は失するだらう、其道其精神は永く滅ぶることはあるまい。故に予の題を命ずるに士道とせん方或は適當かもしれぬ、今はたゞ舊來稱呼の便宜に從はう。

士とは何ぞや

今の世、士の字の附せられて社會の尊敬を買ふものに學士といふがある。學士といへば何となく武士とは緣遠きが如く感ぜらる。されど武の精神は學士の中にもあるべきである、否大になくてはならぬ。フイヒテが眞の學者を論ぜるものを見るに、其品位の氣高く其心術の潔き、眞に櫻花の如く然るものがある。學士宜しく士たるべし武士たるべし。これ實に國家の要するところである。

豈學士のみではない、將來の日本は商士を要する。如何に新聞紙の議論八ケ釜敷も、如何に政府の干渉保護鄭寧を極むるも、眞の商人にして出てざれば日本は到底商業國たるをゝまい。商士出てよ商士出てよ、商業界に一人の士たるものなくんば我日本の海國を奈何する。

尙いふべくは工士についても同樣だ、農士についても然りである。士はひとり武に限らず學に限らず、農工商共にあるべきである。人は凡て士でなければならぬ、天下何れのところか士を要せざらん。聞かずや社會の聲、曰く腐敗々々、墮落々々、暗憺紛糾、澆季、亡國、忌まゝしき此等の聲は皆これ士を喚ぶの叫であるまいか。

士、英語でゼントルマン、今譯して紳士といふが、何んとなく一種の階級の念を感ずる。其衣服の着樣其言語の使ひ方、其動作の爲工合、別樣の趣を存するものがある。世は平等となるだらう、權利は同一樣となるだらう、されど品位の差に至つては到底滅せらるべきである。一國一鄕には必ず一身以て他の五十或は百、或は又千に匹敵すべき人物があり又なくてはならぬ。これありて社會は社會以上に進むことをうる。これに眞人たる資格あり、吾人稱して之を士と名づくるのである。日本に於ては之に冠するに武の字を以てし

て武士といふたのは、此士たるもの多く武にあらはれたからである。果して然らば、武は凡て士たるものの要件なりといはなければならぬ。

新武士道

學者は一箇の武士である、此大宇宙と戰ひ造化と戰ひ、之を征服して人類の領土を擴張するは其任である、武豈に棄つることが出來やうか。商人もまた然り、予謂ふ日本の商人が將來日本の商人として世界に特立しうべきものあらばそは獨り武あるのみと。狡猾や小細工や、これ已に利にあらず名譽にあらず、又竟に武士の商でない。百敗百起捲土重來の元氣常に旺にして遂によく最後の大勝を攫取する、これ商家の武である。農に於てもまた同じ北海道に臺灣に滿州に朝鮮に未開の原野は茫漠として横はるではないか。こゝに我農民

が武士根性を振起して遠征を企つるにあらずんは、農本の國是と人のいふのも、徒らに口頭の論に終るだらう。其鍬をとり犁を肩にして出づるとき、自然を我手に征服してこれを人類國家の用に供せずんば已まじとの精神は其要するところである、武豈に棄つることが出來やう。吾人は我日本民族に此武の精神を與へたまひし神に感謝する、日本民族は之を以て何れのところに向つても進擊しなくてはならぬ、然り進んで已ざまらんことを要する。此士、此武士、商工界の武士、農界の武士、學者界の武士。凡ての社會に在つて其精神となり元氣となり指導者となるべきものは正にこれである。武の精神に生くるの士である。

人武士道をいへば直に忠といひ孝といふ。予も之をいはぬではない、されどこは單に君に忠、親に孝てふ狹きところに限られたるものでないことを記せなければならぬ。日本人の精神は忠君に發揮せられ

て居る。忠とは心を盡くし力を盡すことだ、試に之を擴大せしめんか、即ち君に對する忠は直に國家に對する忠となり又愛國となる。已に君に忠ならば其治め給ひ撫育したまふ國家國民に忠ならざるの理あらうや。かの軍人に於て往々見る所は、一方忠君を誇りつゝ他方には人民に侮辱を加ふることだ、これ眞の忠君ではない。もし國君を愛せば其愛は必然國民にも及ぶべきである。夫れ國家を一人格として之に心身を獻ぐるは人屢之を口にして又よく之を行ふ所だ。けれど吾人は更らに進まねばならぬ、即ち國家を組織する一箇々々の民人を愛し、これに向つて心を竭し力を盡さなければならぬ、これクリスチャンの心である。尙一歩クリスチャンの進む所は即ち世界的同情である、吾々の愛は世界に注がねばならぬ。古への武士の偏狹なる忠、生麥事件の如き、むしろ吾人の耻づる所だ、忠の心愛の心が此世界的同情を發し來るに至らずんば、以て舊武士道は語るべきも、新武士道に至つては未だ俱に語るべからずである。

德川氏に至り、日本の社會に一種の階級を生じた、即ち俠客である。之當時の武士及在上者が武士道の眞精神を失ひ虛傲以て下に臨み、强暴以て弱者を苦めしに反動して起りしものにて、武士以外一種變形的武士の階級を造つたものである。蓋し武士道の精神は單に强きに誇るといふものにあらず、弱小を扶くるも之また武士の道である。故に婦人は常に武士の同情に漏れなかつた。たゞ上なるもの强きもの偉大なるものに犧牲となるのみならず、時あつてか弱きもの小さきもの卑しきものゝ爲めに一命を惜まざることないでない。俠客の事固より未だ是とすべきでない。けれども、そが武士道の一面を代表して時代の缺陷を補ひし者たるを見れば、又時勢の已むべからざる者あつたのであらう。今後の吾人は條理を以て俠客の心事を行はなければならぬ。弱いといふが故に扶くるに非ず、强いといふが故

に挫くにあらず、扶くべくして扶け挫くべくして挫く、これ士たるものゝ心得である。これ已に吾人の中に發生しつゝあるものではないか。しかも突然新に發生したるにあらず、祖先の中に發せんとして未だ發せざりしものが、新春の陽光に土を破つて萠えんとするのである。

次に武士道に重ぜられたのは敬神の義である。これ一家子孫の冥福を祈る爲でない、武運の長久の爲めでもない、かくの如きはむしろ武士の恥辱とせしところである。彼等か神佛を崇拜する所以の義は別に存する。この崇敬の心は古來忠と共に日本の國粹を形づくりしものであるが、歴史は手近き忠の方に人心を驅り、敬神の義は漸く忘れられ、殊に維新以來殆んど度外視さるゝの傾を呈した。

敬の念の現はるゝ所三ある、一は天地の神を敬ふこと、これ敬の本、敬の粹、敬の極だ。常に予が語るところなれば今詳しくは説くまい。

二は對等の尊敬、この敬や、我頭を低るゝにあらず、彼の命を受くるにあらず、相等の禮を以て對するをいふのである。今日の日本に於て、これ甚だ缺けて居る。古へは武士は武士を重んじて、決して彼れを傷け彼れに恥辱を與ふることをしなかつた。自己の尊嚴を重んずるものは、必ずやまた他の尊嚴を重んずる筈だ。同胞兄弟の間然るべく、男女の間も然るべく、外國人に對しても、また此外に出でんやうはない。三は弱きもの、我れより下のものに對する一種の尊敬である。我れと平等なるべきものが病の爲め境遇の爲め貧の爲め不幸の爲めに弱く卑く在る者を尊敬の念を以て之を顧みるのである。其の顧るや乞食に物を投げ與ふる如きでない、吾人の慈善は吾れとひとしかるべくしてひとしきを得さるを思ひやり、顧み扶けて之を平等の地位にあげんとするものである、少くともこれをよきに致さんとするのである。弱小の外國に對するまた斯の如し。之を要

するに、上に向つても、對等のものに對しても、又下に向つても、四千萬の同胞にも、又世界諸國に對しても、世界的同情、博愛、一以て貫くのみである。

去る日のことなりき、予はかゝることども思ひ廻しながら、横濱よりの歸途教文館を訪ひ、新着の讀むべき書はないかと尋ねしに、「紳士の宗教」てふ一書を示された。アチコチと頁をかへして其内容の大略を窺ふに、書は米人の手に成れるものであるが、世界的同情てふことに非常の重きをおき、之を以て米國民の國粋なりといへるを讀み、予はその宏大の精神に感ぜざるをになかつた。翻つて日本の武士道を論ずるものを顧み來れば、其氣魄の小なること豆の如くである。米人が世界の大國民として重きを大西洋上になすもの實に茲に在る。しかもこれ米人のみの國粋たるべきてない、予は飽くまて之を諸君に推奬せざるをにぬ。

士の資格

最後に、吾人の稱する士とは、果して如何なるものをいふか、其資格如何をのべてこの章を終へ、次には士の宗教と題し聊所見を述べやう。

士たると然からざるとは、貧富の上にあらず、職業の上にあらず、地位の上にあるでもない、かの大哲學者にして、イエスキリスト以來ユダヤ人中第一の人物と呼ばるゝスピノザは、眼鏡玻璃磨きを職としし居たてはないか。日本人が職業の如何によりて人を上下するは、未だイエスの精神の彌蔓せざるを證するものだ。士の士たるは品格にあり精神にある、一言にしていへば其人格が天地の主たる神の宮たるの程度にある、行動修業の動機に如何程神性の存するやに存する。たとひ士の稱號を有すとも、その學問にして單に飲食肉情の欲

眞士ナザレのイエス

を遂ぐるにあらば、そは士ではない、予は斷じて之を士と呼ばぬ。士は世界の理法世界の理想の中に生活すべき者だ。活ける神の靈其の中に宿り其行動神と俱なるものこれを眞の士といふのであつて、其學者たり農たり工たると男たり女たるとを問はぬのである。必ずしも劍が士を造るではない、書が士を造るでもない。金力でもない、高位でもない、門閥でもない。此等の一物をも有せず、赤裸々にしてしかも奪ふべからず、滅すべからざる品格を具ふるものは即ち士である。

吾人は此眞士の眞士なるものをナザレのイエスに見る。平民の服、平民の家、平民の食、平民の言、平民と共に働き、平民と共に語りつゝ、彼れは千古不磨の光輝を放つてはないか。これが吾人の理想となるにあらざれば、日本に多くの士の輩出せんこと到底望むべからざるのである。

士に宗教あるべきや否や

士の宗教

「士」と宗教と

大和民族の精粹が武士として現はれたことは、既に「新武士道」と題する章の中に述べました。つら〳〵現今の世を見るに、素より武は如何なる社會の人も忘れてはならないが、天下の人は只武人のみでない。今日のやうに農工商を事とする人が、皆社會の要部を占めて居る以上は、必ず其中にも「士」たるものが無ければならない。「士」といふ名稱は英語のゼントルマンと同じく、總ての階級に適用せらるべき言葉で、男女に拘らず、君子として恥しからぬ高潔の品性を有するものは、皆之を士と言て差支は無い。然らば士には宗教あるべきか否か、士は人類の中で最も高尚純潔な品格を有するとすれば、此士なるものが無宗教にして可なるべきものか否か。

士は人間の粹なるものであるから、人類一般に對して高く深い同情の心を有たねばならぬ。元來武士は人情に富むと言ふて居るが、此人情の深く眞なるものは人間本然の聲から湧いて來る所の熱烈の情緒である。此人間本然の聲は何かと言へば、素と其源を天地に活ける神に賢いてあつて、吾々人類は小鹿の溪水を慕ふごとく、此清く深い源流を熱愛して措かぬ所から宗教の情感がむらくと湧いて止まぬのである。宜なるかな日本在來の武士道は、其基を敬神の大義に立てゝあつて、政事の如きも「まつりごと」と呼んで聖なる業の一つに數へたのである。此宗教的感情に同情を表することの出來ない人は、士と呼ばるゝ資格の無いものである。而かも此同感といふことは、自己の中に切なる深い暖い情緒が無ければ、他と相應することの出來ぬものであるから、眞正の士たるものは、深厚な宗教的情緒に富む所の人で無ければならぬ。

士の資格の一つは天地に交るといふ事である。宇宙萬有の靈氣に觸れて、之と相感應する壯大な情緒は、まことに人類が產んだ中でも最も大なる同情である。されば古來武人と申しても、只武藝の講修のみを心掛けたもので無い、必ず文事をも修めて所謂文武兼備の境に到達せんと理想して居つた。夫れで無ければ眞正の武士とは呼ばれなかつたのである。室鳩巢が、眞の武士は啻に武藝に長けたるのみならず。文運にも强きものたるべしと說いたのは、即ち天地の道に應ずる丈けの、壯大高潔な精神を指したのである。藩政の當時藩毎に藩儒なるものがあつて、仁義道德の眞理を講明した、山崎闇齋の會津に於ける、野中兼山の高知に於ける、熊澤蕃山の岡山に於ける、其一例であつて皆一藩の文教の根泉となり、以て士氣を皷舞作興した。抑も武士の教養は斯く文武の二道に亘つて居るが、其根本たり眞髓たる所は、まことに其品格に在る。而して士の士たる品格

道に對する愛

「士」は人中の人

は天地の道を知る所から生成して來ねばならぬ、此點に於いて武士道は儒教佛教の思想から、培養補育せらるゝ所甚だ多かつた。

道は天地の綾である、春秋の代謝、四季の變遷、整然として則あるところ、是れが天地の道の顯現であるから、この道を學ぶは、則ち宗教に入るの始めである。而して天地の道を學び道を知るといふ中で、萬有の奥秘なる神に對する愛情が、滾々泉の如く湧くに至つて、眞に天地の道を知ると言つて宜しい、此宇宙的同情心を發揮するに至つて、始めて眞個の士と呼ぶべきである。

「士」は國によつて其發現の狀態を異にして居る。猶太國に於ける士は、プロフエット(豫言者)として現はれた。或時は祭司と呼ばれ、或時は王として迎へられた。就中最も直截で、最も深邃な意義を有する稱呼は、「人」といふ一語であらう。「人の子は安息日にも主たる也」、「人の子は地上に於いて罪を許すの權利あり」といふ、其「人」てふ言葉は實に崇高偉大を極めて居る。吾が「士は人也」といふ時は其人は、即ち此崇高偉大な品格を備へたものを言ふのである。

士の宗教

士の宗教に何ぞ

人の中の人たる此士にして、既に宗教の深き情緒無ければならぬものとすれば、其宗教は如何なるものであらうか、如何なる宗教は士の士たる品格に適應するのであらうか。

思ふに士なる名はまことに美稱である、佛教者の中にも士は在る。クリスチアンの中にも士はある。予の希ふところは總てのクリスチアンは士であると言ひたいのである。けれども之を教界の中に見るに、士たる品格無きもの多きゆゑ、クリスチアンの中より更に士を求むる必要があると思ふ。であるから士の宗教は何かと言ふに、必ずしも基督教に限らない、人の據つて立つべき道は總ての種類の人

絶對的道義力存在の信仰

に通ずる筈のものであつて、或種の階級の人のみ、之に據るべき筈のものではならぬ。人道は必ず此性質を有すべきもので、佛者も儒者も吾々基督信者も、皆之を明かにせんと試みて居る。只吾々は吾等の所謂道こそは道の中の尤も完全な道と確信して措かないのである。

さらば士の宗教は何ぞやと言ふに、そは先づ絶對にして無限く、清く眞なる活ける力が、此大宇宙を支配して居るといふ、確固とした信仰である。之は人の人たるべき最大の信念であつて、若し信仰の根本を此處に置かずして、小我の妄見に支配せらるゝものは未だ士たる品位なきものである。山鹿素行の如きも、天地生成の氣よりして、武士道の精神を演繹して說いた。まことに此氣此力こそは吾人信仰の根本であつて、此力は單なる物力にあらず、偉大なる道義の威力である。士たるものは衷心この威力を有するゆゑに、能く物力を制し支配して、自ら慰藉あり精進あるのである。今この信仰を儒教に質して見るに、浩然の氣至大至剛直を以て養ふべきを說き、此元氣の發する所、千萬人と雖、予行かんと壯語して憚からぬのは、全く此の信仰を表明して居るのである。仁齋が天道は直也と言へる、藤樹が天者皇上帝也と言へるを見るに同じく此道義力に、信仰の根本を置いて居る。而してこれ吾が基督教に於いては、其原始より正義を以て最高存在となし、之を以て最後の勝利者として居つた。此信仰は人類一般の據つて立つべき所であつて、彼の基督教反對者として世間から認めらるゝ有名なハックスレーの如きさへ、嘗つて小兒の教養には、最も舊約書が宜しいと說いた。又彼の言葉に、「宗教の本質は頗る簡明なり、舊約の豫言者が心と行とを誠にし、謙遜憐憫の情をもて、神と人とに對すと言へるは即ち是れ」と、道破したのは吾等も同感する所である。馬太傳山上の垂訓の如きは人心の眞情

信條は士の宗教の本意に非ず

士の宗教は合理的ならざるへからず

を發露したもので、人種を問はず、國風を問はず、學派を問はず、何人も賞歎措かざるところ、是ころ人性の中で最も清らかな情感、言はゞ天地の衷情を言ひ現したものと言つて宜しい。而して士の宗教は此示現せられたる宇宙の道を信じ、之に據つて永遠の生命に入るのである。

されば同じ基督教を支離滅裂せしむる樣な信仰個條などを立するのは、もと〳〵士の宗教の本意で無い、かゝる信條は、高潔なる山上の垂訓の大精神から湧き出たものでなくして、全く偏屈なる神學の思想に誤られたものである。士の宗教は其根據をば高潔自由の基督魂に置いて居る、『哀むものは福也、心の貧しきものは福也』、是れらが士の信條である。語は簡潔にして頗る深邃ではあるまいか。

士の宗教は迷信ではならぬ。合理的で無ければならぬ。現代文明の中心は科學であるかのやうに、科學の研究は昌になつて、天地の道理が漸々明瞭になつて來る、士たるべきものは科學に反抗する人に非ず、寧ろ其精神を好む人で無ければならぬ、自己の清く深く幽玄微妙な宗教的意識を科學者の前に露出して、其解剖分析に委するの覺悟が無ければならぬ。近頃は科學の研究に傾きすぎた結果、宗教的缺乏を感じて、之を求むるものゝ漸く增加して來たのは喜ぶべき事なれど、宗教を以て一種の神秘的境涯と思ひ、之を信ずと言ふは闇黑の中に眼を掩ふて沒するの感を爲すものがある。之を名づけて若し神秘と言ふならば、其實は愚を飾り無智を粧ふことに過ぎない。されど人若し宇宙の廣大に感じて理性の鉾も鈍り、判斷の鋭も曇りはて、只々天地の莊嚴を驚嘆して措かざるものあらば、是れ眞の神秘に觸れたのである。遠く望めば烟波渺茫として際涯を知らざれども、猶ほ彼岸の存在を豫想する如く、吾等は眞理の光を認むれども科學は未だ其神秘を闡き盡さざるゆゑに、吾等は之を詩歌に詠じ、

合理と不合理

之を音樂に表して、大なる眞理の一端を窺ふて居る。歴史の進歩と云ふのは、畢竟吾等の窺ひ得た眞理の正否を判斷して行くのである。

此間に在つて人類は。つまる所圓滿なる眞理を握り得ることを確信して、時の歩みを進めて行く、吾等の前路には永遠の光明輝き、正義は最後の勝利者として吾等を勵して止まぬ、此間の消息は正に神秘の生活である。併し現實の世を顧みると、悲慘の事は道路に滿ちて居つて、義人の腸を斷たしむるもの、中々に尠く無い。此間に處して迷はず惑はず、現在に滿足せず未來を確信して生涯を送ることは、確かに神秘にして迷信でも不合理の事でも無い。然るに聖書や宗教的著作の中には、多くの不合理なことが書いてある。波の上を歩む基督や、パンを分てる基督は、神が天地の神にして物質世界をも創造し之を支配し給ふ以上は、かゝる不合理を爲し給ふ筈は無ひ、

人類同胞に對する平等の愛

若し實にかゝる事ありしとすれば、是れサタンの業であつて、神の御手の業ではあるまい。苟くも士たるものが其信仰の根源を養はんには、之を道理に訴へ之を本心に聽くべきである。一度之を不眞理と悟らば、猶豫なく之を棄つべき筈である。只こゝに注意して置くことは宇宙の事物は中々幽玄にして人間の理性を超ゑて居るものがある、夫等は吾々の説明し得ざるもの解釋し得ぬものであつて、之を信ずるは、卽ち超理的であるが、必ずしも不合理では無いと言ふことである。

最後に士の宗教は、男女を問はず、民族を問はず、總ての人類同胞に愛の精神を傾けうるものでなければならぬ。彼の異教を怨み妬み憎むが如きことは、クリスチャンの眞精神では無い。ナザレの耶蘇は、眞に此愛をば自ら示現せられた。基督の御心の中には只「人」あるのみで、サマリヤ人ユダヤ人の區別は無つた、只人あるのみで、

基督御自身には何の宗旨もなく、何の民族も無く、凡ての人に亘りて愛を注ぎ給うた。彼れはイスラエル人にてありながら、異教の人をば、善きサマリヤ人よと呼び給うたでは無いか。假りに今ロンドンの市中に哀れな行旅病者があつたと假定してご覽なさい、其の傍を通る人は多い、しかし見返るものは一人も無い、監督は見ぬ爲ねして立ち去つた。神學者も、富豪も、淑女も皆知らざる如く行き過した、然るに一人の土耳古人、彼の卑しげなるモハメタンが之を見て憐愍措かず自ら介抱し自ら世話して之を病院に送つたと假定したならば諸君は何と思はるゝか、又英人は何と思ふであらうか、予は百人の監督よりも、神學者よりも、此卑しげなモハメダンが、遙かに基督の御心に叶ふものと信じて居る。眞正の基督心は民族の異同階級の差別によつて愛憎を異にす可き筈のもので無ひ、宗派がたとひ異つても、基督の御心を傳ふるに足るものゝ在ることは、吾輩の

記憶すべきことである。抑も活ける神は世界人類を教育するに種々の人を下し給ふた。若し靈の眼を見開ひて、此間の消息を洞觀したならば、思半に過ぐるものがあらふと思ふ。學者を以て之を言はゞ藤樹、蕃山の如き、法然、空海の如き、日本人の中にも神の御前に直き人は有るであらう、田園の野人賤婦の中にも、其人なしとは言ひ難い、支那印度にも必ず之あるに相違ない。

吾人の基督教會に入るのは即ち主の軍隊に加はるのであつて、吾々此中に心の友を得ることは人生の至幸と言はねばならぬ。吾等は此幸福を完うせん爲めには、最も清く最も勇しき耶蘇の子として、士たる道を盡すべきである。人或は基督教は善し併しながら迷信と不合理は猶ほ多きに非ずやと言ふものがある。誠に教界今なほ迷信と不合理とは存して居る、併し之を厭ふは士の本面目で無い、士たるものは己れの仲間に不義なるもの愚鈍なるものあらば、之を自分の

肩にかけて始めて勇氣ある士とは言ふべきであらう。獨りを清うし、てのみ居ることは、士の眞面目ではない、基督の十字架は今も殘つて居る、之れを荷ふものこそ、主の軍隊に於ける眞正の士である。願くは諸君、吾等は道理の光明によつて清く深き宗教の情念を養ひ、活ける天地の神を慕うて、同胞兄弟相愛し相慰めながら、永遠に榮光の中に活きたいものである、吾々が人の中の人、クリスチヤンの中のクリスチヤン、眞正の士として據るべき宗教はすなはち此樣な者であると私は信ずる。

靈的生命の勝利

基督教の世界觀

往昔ある國王は地球儀を抱いて死んだと云ふ傳說があるが、吾々基督信者たるものは天地の神を抱いて死にたいものと思ふ。イエスキ

リストの淸らかな宗教意識に、顯然と煥發せられた至善の神に對する信仰の、如何ばかり崇高偉大のものであるかを思へば、吾々基督信者の精神の中に限りない愛情の燃え立つを禁じ得ないのである。彼の有名なる數學の大家ニウトンが、一顆の林檎が地上に落ちたのを見て、重力の理を發見した時、且つ喜び且つ戰いて茫然爲す所を知らなかつたやうに、吾々信者が明瞭に天地の活ける神を認むる時は、言ふに言はれぬ莊嚴偉大の情感が心の奧底から湧いて來るのである。吾々にして若し一度至善は萬有の主宰なり活ける力なり淸き生命の神也との信仰を握れば、吾々の世界觀は全く以前と別樣の妙趣を呈して來て、宇宙萬有悉く靈氣に滿され光明に溢れ、空を仰げば星辰は燦爛として微笑む如く、地を眺むれば草木も歡喜の聲を放つやうな心地がして、天界の光景は躍々地上に示現する、是が即ち基督教的樂天觀の根本である。

若し人類にして此信仰を失つたならば、其結果は如何であらうか、世界は憂愁と苦悶に滿ち充ちて、恐るべく痛むべき事ばかりと成つては了ひはせぬか、有形の天地を見れば、水火の變風雨の厄は一日も絶ゆる事はなく、野の獸林の鳥も朝夕悲鳴の聲を擧げて人の心を痛ましめる、況して社會の狀態を見れば、罪惡の歷史は永久に繰り返されて、國は滅び世は衰へ、親子相背き骨肉相鬩ぎ、夫婦に愛なく朋友に信なきなど、眼に觸れ耳に入るものは總て皆忌むべき恐るべき事のみであるから、之を思へば何人も終に厭世の情を起さゝるを得ないのである。併しながら吾々人類はかゝる皮相の變遷のみを見て、心を痛め世を厭ふには及ばない、吾々は宇宙を支配し人類を愛し給ふ所の活ける至善の神が、天地の奥底に在し給ふといふ不動の信仰を握つて居るから、假令天災地變に遭うても、榮枯盛衰を見ても、將たまた人類社會の腐敗墮落に接しても、決して失望も落膽

もすることはない、此信仰に立つて天地を觀すれば暗黑の中にも光明は輝き、腐敗の中にも生氣は躍つて居る、鳥の歌獸の叫びは寧ろ讃美の調と聞け、怖しき人類の罪惡史も吾々の眼には善德の發展史と映ぜざるを得ないのである。

思ふに異常なる信仰を抱いて居る人の眼には、天地間一つとして厭はしきものが無いのであらう、キリストの此天地を見給ふや、恐らくは完全な天地の模形と感ぜられたかと思はれる。空飛ぶ鳥も、野に咲く百合も、キリストの前には愛情の光に輝いて居つた。キリストは猛獸毒蛇の中にも、神の恩寵の溢るゝを感じて居られたのであるから、況んや人間社會をば當時の人の如く、穢しき醜きものと考へては居給はない、キリストは稅吏の間に立たれても、娼婦の前に於かれても、紛々たる汚臭に塗へ兼ね給ふ樣な面色は少しも爲し給はぬ、彼は碧の空から舞ひ下つた白鶴の、靜かに塵芥の裡に立つ如

絶對的罪惡の拒否

く、平然として罪人と共に居り給うた、彼はまた一度もパリサイ人を避け給ふた事はない、ペプテスマのヨハネすら荒野に避けたにも拘らず、彼は淡如として彼等と飲食を共にし給ふた、是を見てもキリストが罪惡をだに厭ひ給はず、眞心の親みを以て彼等に接し給ふた事が明瞭に悟られる。試みに子を愛する親を見給へ、其子は如何ほど醜くも心に寸毫の憎惡を挾むものがあらうか、其子生長して後は親の敎に背いて、罪を犯し人に捨てらるゝに至つても猶ほ、惡い中に善き所、憎き中に可愛い所を見出さうとするではないか、キリストの罪人に對する御心も全く是れと同じであつた。吾々は天地の間に絶對的の罪惡が存在しやうとは思はない、至善の神の主宰の下に斯の如きものゝ存在すべき道理は見出されぬ、素より皮相を見るのみては罪惡と苦痛とが世界に滿ち充ちて居るやうであるが、一旦天地の奥底に清く汚れなき活ける神の實在し給ふを思ふたならば如何であらうか、罪惡や苦痛は何時となく雲霧の樣に消え去らざるを得ないのである、是は神の中には罪惡の如き分子は一點も存して居給はぬからである。此故に神が天地に存在し給ふ以上は、世に絶對的の罪惡は存在しないと斷言して憚からぬ事と信ずる。吾々にして此信仰の源を握れば茲に新しい非常の力を得た感じがする、是れ即ち吾々の所謂靈的生命であつて、之を把持した以上はいかに人世が闇黑であり、罪惡の力は怖しくとも、最後の勝利は必ず吾々の者である。

靈的生命

耶蘇の齎せる信仰の生命

基督の煥發せる生命

吾等が崇敬措かざる主耶蘇は、此大信仰を齎して人類の中に生れ給うた。此信仰が人類の間に生れたことは實に吾等の幸福の極みであつて、人類はこゝに新なる生命を得たと申して宜しい、吾々か今日

耶蘇の出現は偶然に非ず

此信仰を得んとして居るのは、此生命が今正に發揮じつゝあるのである、吾々が此信仰を認めて一歩〳〵罪惡を遠つてゆく樣は、恰かも曙の空が漸く白みかゝつて、ほの〳〵と明け離るゝ樣な者で、須臾にして曈々と朝暾の影がさし上ると、山も河も活々しく糺きわたつて、何一つ美しからぬものは無いのである。暗黑の中に生息する間ころ、天地も物恐しく思はれるだらうが、信仰は朝暾の光と同じく、世界を照し人世を和ぐる活きた生命を與へるものであつて、基督が、我は世の光なり」、「汝等は世の光也」、と言ひ給ふたのも、畢竟かゝる清き高き信仰の境涯を示し給ふたものに外ならないと思はれる。此不完全な世界に基督の如き圓滿なる人格の顯はれ給うたことは、實に宇宙の一大神秘に相違なからうと信ずる。併しながら是は明確な歴史上の事實であつて、單なる賢哲の理想や詩人の作物では無く、全く靈的生命の勝利を躬から證明せられたる實在の人格で在らせら

基督の品格は靈的永遠の勝利

れる。イエスは決して偶然に世に顯はれ給ふたのて無い、孰れの國に於いても大なる人物大なる國民が起る前には、之に先つ所の偉傑がある、即ち是が豫言者てあつて、彼は言葉を以て未來を語るのみならず、自己の人格を以て靈性の勝利を告げ、偉大なる者の降生を豫言する。ヨハネの如きは即ち是で、「我に後れて來るものは我より優るもの也、われは其靴の紐を結ぶにも足らず」と言うたのは、全く此間の消息を認めた者と思はれる。

凡そ人物に貴ぶべきものは其智識ては無くして其道德である、かのキリストが人類を超越せらるゝ所は政治家哲學者としてにあらずして、其清らかな宗教的意識にあるから、キリスト或は哲學者としての釋尊、政治家として孔子に一歩を輸するかも測られないが、其尊嚴と偉大とは、少しも之によつて增減されない。神と人類との合体すべきを示し給ひ、高明の靈性を以て人類の上に立ち給ふて其品格

この生命の發展

は、千古を通じて輝き止まぬのである。かゝる宗教意識が人類の中から生れたのは全く人類の勝利を示されたので有らふと信ぜられる。人世は戰鬪であつて、その進歩發達の爲めには、幾多の困難を經なければならぬ、「呼われ惱める人なる哉」の一語は、曾にパウロ一人の聲では無くして、人類一般の心底から湧き出でた痛切の叫びである、この苦鬪の中に諸〻の聖賢が諸〻の民族の中に顯はれて、各々靈性の勝利を示されたが、基督に至つて終に永遠の勝利を握られました。「爾等世に在つては患難を受けむ、然れども怖るゝ勿れ我既に世に勝てり」とは、基督の高く淸らかなる人格の中から湧出でたる凱歌の聲であつて、悲める者惱める者、苦鬪の巷に立てるもの、皆之によつて新なる生命新なる元氣を起さざるを得ないのであつた。而して此一大凱歌、一大宣言をなされた基督の人格は、雲の如く霞の如く天空の彼方に消え去つたかと申すに、決してゐうてない、彼が十字架上の死は恰も麥の種を蒔いたと同じく、人類の中に長く其生命を傳へて、彼の尊き人格に似たる多くの人格をば地上に產み出したのである。基督以後の世界歷史は則ち靈的生命勝利の歷史に外ならない。

勝利の實驗

靈的生命の勝利

既に基督を信じ其心を以て心とすれば、或ものが胸中に湧き出でゝ從來己れの力では勝ち得なかつた者にも、容易に勝ち得るやうに思はれる。是はクリスチャンの常に實驗する所であつて、私の如きも信仰の道に入つて僅かに廿七年の短日月を重ねたのみであるが、自分では確かに此勝利を實驗して來た。素より時には敗れもし傷きもしたが、敵に脊を向けたことは無かつた積である。是は苟もキリストを信じ天地の神を吾々の君主也と信ずる以上は、吾々凡夫も能く爲し得る所で有らうと思ふ。聖書の中に、「神によりて生れたる者は

信徒の生涯は靈的生命の發揮也

罪を犯さゞる也」といふ一句がある。私は長らく此句の意味が分らないで、私に吾々は神により生れた者なるに拘らず、常に罪あることを歎くは如何なる故かと惑うて居つたが、後ちルーテルの言によつて、稍々慰安を見出した。彼は嘗つて「吾は惡魔と戰つて幾度か傷を負うたが、併し一度も頭を下げた事は無い」と申した。私も此見地と意氣とによつて、少しく慰安を感じたが、心中猶ほ安じない所があつて、更に思を潛めて之を考へたが、終に一箇の信念に到達致さゝるを得なくなつた。即ち吾々人類は素と神の子であるから、神が罪惡を犯し給はぬやうに、吾々の心の奥底には罪惡に汚されぬ所の或物が存在して居る。若し存在して居ないとすれば是れ未だ靈的生命を發揮し得ない人であらう、吾々クリスチヤンは基督の救によつて、此靈性を發揮するを得自覺するを得たのであるから、吾々の生涯は最早罪惡の生涯では無い、益々此生命の光輝を放つのが、眞正のク

如何にして斯生命を得んか

リスチヤンの生涯でなければならぬ、普通のクリスチヤンが信ずるやうに懺悔を事とするのみでは、決して靈性の勝利は得られない、靈的生命を發揮して飽まで罪惡を克服して行く勇敢の生涯に入れば、最早吾々は罪惡を歎くに及ばない。私は斯く考へ始めて漸く內心の慰安を得たのであつた。

諸君、諸君もし眞正のクリスチヤン、ライフを冀ふならば、早く外なる人を脫して內なる人を明らかに認めなければならぬ。基督御自身が煩發せられたる彼の清く高き靈性を、各自の胸中に生まねばならないのである、基督は「吾に從へ」と申された、併し之は奴僕の如く盲從せよとの御心では決して無い、「吾は最早汝を僕と呼ばず」「汝は吾友也」と言ひ給うたのを見ても、吾々人類にして若し清らかなる靈性を內に藏めてあるならば、彼基督の友たるを得ると明白である。而して此靈性は靈なる神の惠によつて得たる者、基督によつて發揮せ

られた者であるから、オーゴスチンも嘗つて、「キリストは天性也吾は其恵みによつて救に入ると」申された。吾々人類の良智良性は本來勝利を得べき筈のものであつて、かゝる神の賜物を抱きながら、罪惡のために敗亡する抔は、まことに人間の大なる恥辱ではないか。現今の社會を顧みれば同胞兄弟の多くは、未だ此尊き生命を認めて居らない所から、此大なる恥辱を演じても自ら其醜を知らぬのである。人間が罪に溺れて浮ぶ瀬を知らぬ程慘憺たる光景がありませうか。尊き靈性を抱きながら之を知らずに居る程恐かな事がありませうか。吾々クリスチヤンが此間に立つて、一念專心靈性の勝利を信じて、天國の建設のために奮闘せぬならば誰かまた此社會を清うする者があらう、「神は生き給ふ吾等は死せず」と豫言者が言ふたやうに吾々も亦諸君と共に、「誰か世に勝たむキリストを信ずる者也」との言葉を繰り返したいと思ふ。

天眞の聲

光の源を慕ふの聲

羅馬書第八章第十四節以下に記せる所は獨りポーロの天眞の聲なるのみならず總べて道に志し神を信ずる人々の天眞の聲と云つて可いと思ふ。凡そ人が其天眞を披瀝するときに吾人は二つの聲を聞くことが出來る。其一つはいと高き天より低きこの地に墮落したといふ悲しい口惜しい聲である。此聲や實に新舊約の聖書に聞かれるのみならず殆んど世界全人類の等しく叫ぶ所のものである。夫の印度に於ても世界の素性はもと高尚なる佛なりしも夫れより墮落して今の有樣になつたといふて居り、支那でも世の人々は天の命を暗まして生れたものだと唱へて居る。波斯に於ても同じく人をば高き光りの世から暗き此の世に落ちたものとし、希臘でも矢張り此考があつた

ものと見ゐ千載の哲人プヲトーの如きも人は元來生るゝ前には天の彼方に星のやうに綺羅〳〵輝いて居ッたが遂に此世に墮落して限りある肉體を取るに至り丁度牢屋に繫れたと同樣の苦しみをして居ると說いて居る。此苦しい考、即ち人は本來墮落したものだといふ考は誠に堪へ難い苦みを齎す所のものである。尤も只單に人は本來下等のものだといふのみならば吾人は決して之を苦とする理由はない、けれども元來が高尙で立派であッて且つ高尙で立派であるべきものが何う云ふ譯か墮落して今日の有樣に居るといふ考が且胸に浮んだ以上は自ら古鄕の貴さと榮ゑとを憶ひ今の境遇に引き比べて大なる憂愁を生ぜざるを得ない。例へば夫の雄將ナポレオンがセントヘレナの孤島に在る時の心持は如何で有ッたらう。一時は全歐洲の覇王として威名並ぶものなく榮耀榮華の數を盡した其人が海波萬里を隔つる一孤島に語らふ友もなく幽愁の身となッたときに英雄の胸中自

ら撫然たるものあッたに相違ない。以前の盛なる生活と絕島の現在の生活とは丸で雲泥の差である。此を思ひ彼を思ふて彼は實に遣る瀨なき思ひに迫ッたらうと思ふ。人が前生の光榮を追懷するのも是と同じことである、ポーロの苦聲も之であッた。人間一度は此の樣に心苦しむといふことは何處にもある事實である。然らば一體如何してなべての人に斯かる考は起るものか、何處に其考が見出さるべきものか。といふに我輩は慥かに人の心中には非常に淸らかなものがあッて之を言ひ現はし之を自覺した結果こゝに至るのだと信ずる。抑も吾人心を虛うし懷を怛にすればその奧底には實に立派な淸潔な威嚴赫々として一種犯すべからざるものあるを感ずるものである。古の聖人をして持敬の工夫に到らしめたものは即ち是だ、所謂獨を愼むといふのは此の內心の威嚴を敬ふ所以に外ならない。而して此の內心の威嚴は決して此俗世界より生れたものとは思へない、世界

以上のものに相違ない。人その理性を研くときには天資の靈質更に一層の光彩をまし輝々として三千世界をも照り透すと思はしむるに至るものがある、これがこの俗世界の所産だらうか。吾人は眞面目に之を考へて此の世以上の處より照り渡るものとする即ち内心光明の本源を以て俗世以上に存するものと自覺せざるを得ない。人の心は普通濁つて居る、けれども之を研くときは其處に天性犯すべからざる道の心あるを見る。一体人の心は氣質の變化によりて蔽はるゝことを免れない、けれども之を開けば必ず眞の天眞を見ることが出來るものだ。人の心の皮を幾重も剝げば其處に天眞の伏在するを見るのである。眞は精々の至りというて居る、其精々の至りなる天眞が吾人の心の奥底に潜んで居るのである。其天眞は一体何處から來たものだらうか。古へ印度に佛陀といふ人が居ッた、人々は之を天より降ッたと思つた。ユダヤに耶蘇が生れた、人々は之を天より降

ッたものとした。どうせ人類は何處からか降ッたものである。本來は此娑婆のものでないといふ考は眞面目に心を研いた人の天眞の聲であるといふことは蓋し明かであると思ふ。

扨て茲に一言辯じて置かねばならぬことがある。ろは近世科學の敎うる所に依ると我輩が前に述べたる所と趣を異にし、世は決して墮落したのではない、却て下等な處より漸々進化發達したものだといふ。此事や慥に明白の事實にして取消すことの出來ぬものであらう。然らば之と前述べた所と矛盾するではないかといふ懸念があるけれども深く考ふれば決して左うでない。抑も此の世が進化開發を致し極く惡るい處から極く善いものに進むと云ふのは蓋し形骸のことである、單に外形に表はれたものに就て云ふに過ぎない。元と〳〵立派なる無窮の力が後楯となり根本となりて居らなくては如何して斯かる千態萬狀の世界を來らし又斯く進歩發達せしむることが出來や

うか。誰か全く清からざるものより清きものを出し得やうぞ、又誰かよく不完全なるものより完全なるものを生じ得やうぞ、進化を本當の事實として許す以上はまた同時に其裏面に貴重なる完全なるものあつて導きつゝあるといふことをも承認しなければならぬ。科學は天地あつて以來のことを見るに過ぎない、宗教は即ち直ちに天地の根本にして天地の裏に活働する神に向ふのである、吾人を神と較ぶるのである、鳥獸虫魚と較ぶるのでない。斯くて物事を根本に較ぶるときは自ら今の現狀に慊焉たらざるを得なくなる、神に向ひて人類の墮落を感じ茲に悲痛慷慨の情を洩らすは蓋し當然である。而して吾人は實に此嘆聲を發するところに人間の天眞を見るものである。一體人間といふものは其始めは作らず飾らず只有の儘をやつて居ること、例へば子供が饑じくなつて啼泣するが如きものである。然るに段々文明に進むと人工や修養が積んで來て笑ふことも泣くこ

とも能うせない、務めて泣く思を起さない、よし起しても之を抑にして泣かないで心の奥に隱して仕舞ふ。此段になると一方より見れば大に天眞が減じたものといはねばならぬ、併し中には之を隱し負うせないものがある、只之を人の見る前に出すのは如何にも耻かしいから强て秘密にして居るのみのものがある。けれども之を秘密にする丈け心中に苦悶の情を感ずる、夫れでも之を秘密にして人の前に出さぬ、即ち人心の奥底に深く秘して親にも妻にも云はれないものがあるのである。而して此秘奥なる處に亦天眞を見ることが出來る。夫の小說家が一管の筆を弄し讀むものをして泣啼已まざらしむるものは此の隱れたるものを現はに見せるからだ。人々亦興味を以て其作を讀む所以は內心に秘藏して居るものが明に出て居るから、從て之に同情を寄せざるを得ぬからである。

凡そ人には本當にその弱きを感ぜしむるものがある。勿論强く感ず

るものもある。強い處は易く人にも見せる。けれども弱い處未練な
る所は人に見せ難いものである。斯くて弱さを感ずるの心はやがて
助を求むるの聲となる。此處に亦吾人は天眞を見る。此聲のうちに
一ッの宗教的の叫即ち神を呼ひ出す所の聲を見ざるを得ぬ。神を呼
ぶは即ち助けを求むるのである。如何に勇猛なる益良雄でも吾に一
片の同情を寄せて之を助けんとするものありと知るときは必ず之に
感謝するであらう。纖弱なる手弱女は固より丈夫を助くるの力はな
い、けれども其熱き同情の涙は實に古來幾多の猛將をして之に酬ひ
ざるを得ざらしめた所のものである。益荒雄と雖も心の中にては助
を求めて居るのである。而して助を求むるの最も大なる聲は即ち天
に叫ぶ所の聲だ、此世に降りて其故郷なる天を慕ふ所の聲である。
此聲をいみじく言ひ現はしたのは即ち舊約書の詩篇である。人或は
之を以て徒らに助を求むるの嘆聲だから面白くないといふ。斯うい

ふ人は未だ人の天眞に同情のない人である。昔し封建の時代特に岡
山鳥取の地方には貞潔を破ッた婦人は之を手打にするか又は自害せ
しむるの風習があッた。或時一人の娘が貞潔を破ッたといふので將
に之を手打ちにするといふ際に俄かに大地震が搖つて來た、すると
母親は取るものも取り敢へず其女を抱いて飛んで出た、地震鎭まる
に及んで除ろに手打に遇つたといふ。之を聞いた人々は皆笑つて今
に殺さるゝ者を抱いて飛び出るとは馬鹿げた事だといふたさうだ。
併しそこが本當の天眞だ、父母の至情の期せずして現はれたところ
である。斯かる突嗟の間には武士的の修養も訓練も天眞の發動を禁
じ得なかッたのを見ねばならぬ。此の天眞の情こそ世を救ふ至愛の
力の一面の表現である。夫の婦人も母親に抱かれて出た時の難有味
は如何なであつたらう、此有りがたさや實に十數年間の保育の恩に
勝るあるものを感ぜしめたであらう。是れ必竟心の奥底に助を求む

るの念があるからである。

基督の御一代のことで多くの人のいぶかる所は基督十字架にかゝりて死に給ふとき「吾が神〳〵何ぞ吾を捨て給ふや」と宣うたことである。此の世に二人となき基督が今はの際に何んでこんな未練な言葉を吐き給ふたかと批評する人もある、が併しこれこそ本當の天眞であり、本當の叫びである、恥も何もない心の儘を言ひ表し給ふたのである。之は基督御自身の心に入らなければ分らぬ所であらう。思ふに吾々の生涯の中にも斯かる事屹度起るに相違ない、只腹の中にあつて之を口外しないのみである。基督は即ち之を敵の前に公言し給ふたのである。秘して云はざるは即ち人工だ、天然自然に發したのが基督の御聲である。以上は世界人類が天を仰で嘆く一方面の聲である。吾人が會堂に集りて天に訴ふるのも即ち之れに外ならない、茲處に集るものゝ此心情に驅られてることは慥かである。神の影の隱るゝ

こと即ち神より離るゝことは甚だ苦しい、是れ禮拜に集る所以である。

同情の聲

次に他の一つの聲は上記の慨嘆の聲に應じて之を滿足せしめんとする人間その者の聲である。是れ即ち同情である。泣く者あれは互に手を取りて助けんとする所のものである。此同情の念は天眞でなからうか。人を助くるの精神は天眞でなからうか。慨くも天眞であり、同情も亦天眞である。助を求むるを天眞とせば之を助くるの聲は更に一層奥深き天眞より出づると思はざるを得ない。疑もなく此情は亦天の奥底から來るものであらう。斯くて此聲を發する人も又之に應じて人を救はうといふ人も共に天より來つたと思はるゝに至る。主基督が自ら天より來れりといふたも必竟此清い所の人を救ふとい

ふ天眞そのものを有して存在せしことを云ふのだ、吾が故郷は天であつて我が存在は天そのものゝ存在だといふ聲である。此聲や吾々に響いて即ち福音の聲となつた、そは世の慨く者を救はんとの御聲だからである。偶然の叫ではない、天の深い所から來る聲である。

よし慨の聲は一時の聲とするも救ふといふこの聲は即ち天の聲であつて、吾人の心の奥底にある至情である。所謂已む能はざる大和魂といふのは是だ。實に不思議な力である。見よ親が子を愛するのは頼まれてすることではない、愛せざれば吾れ禍なりと感ずるのである。眞の憂國者は作爲でもなく國と約束したでもなく、只已む能はざる一種憂國の情が生れて吾國を愛せざることが禍だと感ずるに至つたのである。慈善事業を爲すものも亦同じである。夫のハワードの秘訣とせし所も之であつた。「ナゼ己れが(Why me?)」此世に人も多いに何んで己れ如きが此の事業に當るのか只中心已むを得ぬからで

ある、拒否することを得ぬからである。岡山の孤兒院の石井十次君の如き亦此類であらう。ポーロは實に此感を有して居ッたのである。而して斯く感ぜしむる力は人の私心より出づる所でない、天より來ッたものである。この最も清い人を助け救ふといふことは天に非ずして何處から出て來やうぞ。人々が主基督を以て神の子と信ぜざるを得ぬ所以のものは、主が人を助くるといふ同情は神そのものゝ懷から發したからである。扨て此福音の聲に應じて生じたもの、即ち人が助を求めて其處に天外に聲をきゝ、其聲を心に透し斯くて生じたるものは即ち凱歌である。今までは負け續けで思ふ通りにならなかッたのが俄かに一切の障害を衝き破りて素晴らしく突進する境に至つたのである、限なき理想として有せる神を前面に押し立てゝ之に進むといふ精神が勃興したのである。之に向つて進むといふ元氣は神から救の聲が響いた後でなければ決して出やう筈はない。勿論

我慢でやッて退ける人はある、けれども之では本當の處に達するとが出來ぬ。我慢でやつた丈けに悲しく涙を流すことが出來ぬ、「我か神〳〵何ぞ吾を捨て給ふや」と叫ぶことが出來ぬ、又泣いて弟子と語ることも出來ない。斯くては感情に溫い處がないのである。吾人は基督に於て弱きこと小兒の如きを見、小兒の如き所あると同時に又泰然自若たる元氣の存するを見る。其能く之あるを得る所以は愛なる神の聲を聞いたからである。神の愛なる聲を聞く人は一方には柔なると乙女の如く、一方には剛なること壯夫の如きを得る。冬枯の木が雪霜を冒すが如きではなくて、百花爛熳たる中に犯す可らざる威嚴を示すといふ態である。斯くの如きは能く基督に於て見らるゝのである。ポーロが羅馬書に述べたる所は之に外ならない。吾輩は今切に讀者諸君に望む、願くは諸君の奥底に眞に弱しと思ふ所を神前にさらけ出し、神より限なき恩愛の力を賜りて元氣を勵まさんこ

とを。斯くて吾人の中に如何なるものが生れて發達し行くかを實驗することを得て、吾人の天眞を全うすることが出來ると思ふのである。

神の顯現

神人の呼應

親愛なる兄弟姉妹諸君、吾等が心から渴望する所は天地の活ける神を見たいといふことである。古の詩人が「鹿の谷水を喘き求むる如く我が魂も亦活ける汝を慕ふなり」と歌つたのは眞に吾等の心情を表したものだ。宛も赤子が慈母を慕ひ見んとするが如く、吾等の心は常に活ける神を慕ひ望んで止まないのである。而して天地の活ける神はこの切なる吾等の心に對し冷々淡々として更に應じ給ふ所がないであらうか、否決して然うでない。一体吾等のうちに神を慕ふ情念の

天然に顯はれたる神

燃ゆるのは吾等を生みし神が此情念を吾等に授け給ふたからである。然らば此情念を授け給ふた神は何んで吾等に對して冷淡なることを得やう。我れ靜かにれもひ見るに神は常に吾等に現れて己れを見せしめんとして居る。若し吾等に身を殺しても神を見んとするの誠だにあらば、神には更に大に其姿を示さんとするものあることを感ぜざるを得ない。今それ吾等にはこの情感がある、この情感の深くなるに從ひ吾人は種々の方面に於て神を見ることが出來るのである。

物力の神

この大なる物質の天地は、決して口なく耳なきものでない、古の詩人は「天に言葉なし、されど其聲は地の極にまで聞ゆ」といふて居る。實に天地は一種の言葉を放ちて吾等にもの言ふのである。是れ何れの時代にも詩人あり預言者ありて天地の裡に一種のインスピレーション（神興）を得、以て宇宙の奥秘を世に紹介した所以である。されば有形の天地悉くこれ神の顯るゝ所である。天地は慥かに神の言葉たるに相違ない。此言葉を合點するものは即ち神に面することが出來るのである。かの未開時代の人が月日を以て神としたるは固より人文の幼稚なるの致す所なりとはいへ、また其中には限りなき人世の内容を含んで居る。日輪東海の天を出でゝは人をして自ら平身低頭して之を崇拜せざるを得ざらしめ、又は殘月明け方の空に消えんとしては見る者をして戀々として其名殘を惜ましめる。今日とても吾人或は深山幽谷に分け入り、或は激浪怒濤に接して天地の限りなき壯觀を見るときは、一種言ふ可らざる感を禁じ得ない。是皆天地の活ける神が地上の子供等をして己を慕はしめ己に交らしむるためのものである。夫れ人と人との交は心と心との交通である。けれども先づ容

貌顔色をかりて面會し、更に衣を纒ふて相接するのである。活ける神も亦衣なくしては人に接し給はない、天地は即ち神の衣である。此壯大なる威嚴ある天地の裝を以て神は吾人に接し給ふのである。この物質の天地を見ても吾人は實に神の力と智慧との大なるに感ぜざるを得ない。

審判の神

神の人に接するや只天地のみでない。更に歴史を究むるに亦こゝに神の顯現を見る。歴史を以て只國家の治亂興廢のみを列べたものと思ふは皮相の見だ、吾人は歴史を學んで慥かに天地には主宰者ありて万國万民を統治し、一の大方針に向つて人類を導きつゝあるとを認めざるを得ぬ。古人が國家の滅亡を以て一の大審判と云つたのも、又は「有德有道の人起れば一代には天の助なしとするも後世必ず王者起

る」といふたのも皆決して偶然ではない。只目前のことを見ては天道是乎非乎と惑ふこともあるが、百年千年を通じて達觀する時は、公義正道が儼然として人界を支配しつゝあるを認むるのである。此公義正道に基かずして大國民となつたものはない、政府人民亦之に依らずしては亡びざるものはない。人類社界に犯すべからざる(Justice)(正義)存することは決して之を疑ふを得ぬ。而して神がこの公義正道を有ち給ふことは歴史の敎ふる所ではないか。万國史を繙きて之を見ないのは盲である。峻嚴犯すべからざる神の支配を見る能はざるは史を讀んで史を知らず、人間を學んで人間を知らざるものと云はざるを得ぬ。

道義の神

次に吾人銘々の本心に神の顯現を見る。抑も淺果敢なる智識を以て

考ふるときは天地人類の歸趣溟濛として其始終を知らず、時として
は又天道の是非をも疑ふに至る。只獨り動す可らざるものは銘々の
本心である、善を爲せとの聲は本心の常に命ずる所であるが、此本
心の聲は假令人には疑はしく見にても決して心中に止むとはない、
一時之を塞いでも時ありてか復た光明を放つものである。かくて道
理を以ては終りを見ることが出來ぬとしても、人の本心は直覺にて之
を見ることが出來るのである。本心の聲は即ち神の聲である。ソク
ラテースは本心を以て神が日夕我に伴うて其爲すべきを敎ふるため
に與へ給ふたものと自覺したといふて居る。吾人か日常の行爲に唯
一の據所とするものも亦この本心である。基督の言葉に身の光りは
目、目が暗ければ全身が暗い、汝等の中の光暗からば其暗きと如何
ばかりぞやとある。本心の暗きときはソレこそ眞の盲目である。肉
體の盲者ですら吾れ日々夜々に暗所に居る、セメテ晝夜の別だに知

りたいといふてはないか、其の心情賊に察するに餘りある。日輪輝
けども眼者には眞暗闇である、況んや天地の美景をやだ。盲詩人ミ
ルトンが秋去り春來る夕來り朝去るも我には春も曙も遂に來らざる
なりと歌つたが、吾人誠に同情に堪にぬ。若し夫れ進んで本心の盲者
に至つては更らに一層憐むべきものでろれこそ眞の Eternal Night(永久
の暗)である。彼は善惡の差別を分たざるが故に其善とする所却て惡、
其惡とする所却て善、公義正道何處に行はるゝやをも知らずして、色
々の疑惑に苦んで居る。神の光、は太陽の光に劣らないけれども、本心
の盲は之を認め得ぬのである。其不幸實に名狀することが出來ない。
一体本心なるものは神の吾等に與へ給ふたものである。神を見るの
目は卽ち人の本心である、神は己れを見るを得しめんがために人に
本心を授けた。尤も神は色々の手段によりて吾人に接するけれども、
本心に依る程明なることはない。此本心より見るときは神は單に物

力ではない、單に審判者ではない、我と深き倫理的關係ある道義の神であることが分る。

至愛の神

さて神はたゞ之等のみにて人に接し給はない、神の現はるゝ一層深い方面が別にある。予はこの事を一度ならず云ふたが。茲に又之を再びせざるを得ない。そは神は父母を以て吾等に現はるゝとである。何れの國にても父母を敬ふは凡ての道德の根本として尤も重んぜられた所のものである。何故に父母を敬はなければならないのか。若し吾等を生んで乳を呑ませたからといふのみならば、何ぞ鳥獸に勝るとがあらう。子供を育つるとは猫も之を能くする。反哺の孝は烏の如きものにもあるのである。然れども人類が特に父母を尊敬するを以て倫理の第一則とする所以は、子供に對する父母の至誠に基す

るのである。抑も父母の子に對するや誠に一點の私情がない、父母は己れを忘れ凡てを犧牲にして子供のためを思ひ、何もかも子に與へて惜まない、只子供の生長するを見て樂むのみである。死に垂としたる老母の身を以て猶一家の主婦たる勢力を有する所以は只子に眞正の同情を注ぐからである。吾れ名譽を得利達を得たる時には隣保の親と雖も之を嫉むものないではない、眞に之を喜ぶものは父母のみである。眞に子供の喜憂をわが喜憂とするは父母を措いて世界に二人とない。心から吾に同情して呉れる人は鬼神に非す偉丈夫にあらず只一人のかよわき老婦人なれども、吾人は此老婦人の同情に勵まされ慰められるゝと如何ばかりだらうか、然らば其父母の至情の尊いこと如何ばかりだらうか、其眞情や吾等之を尊敬せずして居られまい。平身低頭せざるを得ないのである。位人臣を極め氣宇一世を蓋ふの士も骸骨の老女の前には頭が上らない、是れ子に對しては

他に天地間に見出すを得ざる一種の(Dignity)(尊嚴)を有する故である。不幸にして世には往々之を蔑にするものもあるが、之を尊ばないのは實に恐るべきことである。父母を尊敬することと神を尊敬することとは二つでない。父母の心を痛めつゝありて如何でか世界にわが命運を完ふすることが出來やうか。蓋し天地の心と父母の心とは一つである。父母を苦むるの罪は天地必ず之を糺さずしては居ない。天地の神はこの父母の心中に在る眞の無私の心情に於て顯現し給ひ、斯くて神は日々吾々に接し給ふ。之を見ることを得なくては吾等は目のないものである。況んや之に背くが如きは言語道斷である。東都に遊學の青年輩が往々僞りの手紙を田舍の父母に送りてよからぬ費用に金を貪るが如きは眞に墮落の極である。尊き父母の中に於て天地の神に接するを得ざるものは到底天地の至仁至愛を味ふことを得ぬ。

尙此外に神の顯はるゝ所がある。人を顧み又は國を顧みるといふ方面卽ち慈善家若しくは憂國家の中に現はるゝのである。クリミヤ戰爭のとき病兵どもが彼のナイチンゲールの足跡を聞けば天使の足跡を聞くの思をなしたといふ。只一つの同情の念が兵士をして之れを神と思はしむるデビニチーを有するのである。

今英米獨佛の諸國に行つて見るに、何れの處にても愛國者の爲に銅像石碑を造つて尊敬を捧げて居る。わか帝室に於ても臣下たる正成の銅像を宮城門側に建てゝ尊敬の意を表し給うてある。斯く憂國忠誠の士に對し國民をして之を神の如く思はしむるは必竟天地の神が一個人の中に顯現したものでなければならぬ。一天万乘の國君すらも赤誠を以て祀り給ふこの忠臣の心靈は實に一種の顯現と見るを得ぬであらうか。

基督に於ける最高の顯現

斯く數ふれば限りがない、終りに茲に其顯現の尤も大なるものを說かざるを得ない。神は尤もよく何によりて現はるゝかといふに人間によりていあある。しかして其最も著明なる顯現をわれは之をナザレのイエス、キリストの人格に於て見る。キリストが世に在る間の事を考ふるに實に非常のものがある。キリストの同情は總ての者に及び罪人稅吏の友となり淫賣婦すらも之を避け給はず、汚れたる人も清き人も等しく友とし友とせらるゝことを得た。又此人によりて社會の正義の觀念が全く變つた。この人の最後の三年間は犧牲の生涯であつた、自分のものを悉く人に與ふるの生涯であつた。この心と父母の至情とを比較するときは父母の衷情も雖もキリストの前には顏色を失はざるを得ない、聖書にも父母を指して「汝等あしき者ながら子になくてならぬものを與ふ」といふてある。父母の眞情の中には猶「あしき」と云はるゝ私があるを免れない。今より三十年前までは、生み立ての子を殺すといふ風俗があつた。今でも時には胎中の子を殺すものもある。明治の世になつて僅かに之の權利を認めた位である。父母の愛情に私のあるのも云はゞ最もである。愛國者の如きも亦キリストの前に至りては矢張り私情あるを免れぬ。パウロすらもキリストを見ては自らを汚れたりと感じたではないか。ゼルマン民族の聲を代表し慨然として羅馬法王に反抗したルーテルの愛國の至情といふものは燃ゆるばかりであつたけれども、キリストの前には其至らざる處頗る遠きものがあつたのである。イエス、キリストが全世界の人類を思ふ情に比ぶれば天下何物も及ぶものはない。今日の元老諸公が三四十年前身を挺して國事に奔走した勢は素晴らしいけれども矢張り胸中人に云ひ難き私情があつた。「もし志を得たらば

といふ考が彼等を動して居つたのである。キリストに在りては之が清い、父母も何も及ばない。而して此キリストの心情をば之を偶然と見るべきか。怪物と見るべきか。之を怪物と見るならば即ちそれ迄の話なれど、若しイエスを本當の人であり、良心を有し父母の情、愛國者の心を代表し、人間のあるべき總ての者を代表せしものといふ以上は、之を天地の大精神天地を主宰する眞心を顯して人を照すものと云はずして何とか云はう。キリストが怪物ならばわが本心も父母の心も皆僞だ。去らば天地も僞だ。天地は茲に眞暗闇となるであらう。吾人は到底キリストを以て神の顯現と見るの外はない。此人に於て吾等は神が吾等の愛の父たるを認めざるを得ぬ。之より大なる顯現を見ることが出來ぬのである。

それ神は種々の方面に於て自分を顯はすこと前述の如きである。或は物力に現はれ或は智識に現はれ或は公儀正道に現はる。然れども吾等の眞に見たいと思ふのは神の本體そのものである。即ち神が恩愛を以て接し給ふ所を見んと欲するのである。之を見之を握る以上は其外にわれには望がない。而して基督によりて現はれたる所はこの神の本體そのものである。世の多くの宗教には天堂と地獄とを說くが予は其故を知らぬ。愛なる神を有するものには地獄はない筈ではないか。吾人には只天堂あるのみである。天堂とは愛なる神と共に居る所である。吾等は既にキリストに於て神の顯現を見た、是に於てか天を慕うて止まない。もし神の大御心ならばわれ何んぞ劍の山熱湯の釜を恐れやうか。只懇ひ求むる所は神の恩愛のみである。之と共ならば何事も出來る。こゝに吾人の天堂は存するのである。眞の親孝行ものがどんな困難をも喜んで爲るのは心から親の恩に感じたからである。眞の忠臣は君の爲めに粉身するを却て喜びとするではないか。神の恩愛に感ずるものにありて難行苦業何かあらんで

ある。

吾人が神を見んとするは神を己れに欲求するが故である。神の持ち物を欲するに非ずして神そのものを欲するのである。パウロも云つた通り Not yours, but you である。神も亦吾等に對して、わが學識や才力やを求めずしてわれ等自身を求め給ふ。Not mine, but me である。吾等が日夕念じて願ふ所は神のものでなくて神自身を與へられんことを望むのである。眞に親の恩愛を考ふる人は親の財産をほしいと思ふに非ず、親その者が欲しいのだ。財産の如きは顧みる所でない。男女其配偶者を選ぶにも其尤も注意する所は魂である、其美醜財産の如きは主眼でない。その人格のいみじきを選ばんことこそ本心の願である。財産はなくなることあつても魂は何時までも殘り、人格は年と共に輝くべきである。斯く吾等の願ふ所は神そのものを得ることである。もし吾等眞に神を抱くを得ば此上もない幸福である。

天地はよし無くなるとも活ける神はどうか握りたいものではないか。神は種々の手段を以て吾人に顯はるゝはそも何のためか。キリストが十字架に死に給ひたのも何がためか。皆これ神が吾等を求め給ふ所以ではないか。神の吾等を顧み給ふことや斯の如く切である、吾等之に對して晏然として居られやうか。吾等固より汚れたるものだけれども躊躇するには及ばない。神は有の儘吾等を抱き給ふ。神は吾等が錦の衣を着て天に歸るを待ち給はない。神は汚れたる儘の吾等を抱き其の愛によりて吾等を清くし給ふのである。

抑も天に向つてわが父〳〵と叫ぶは吾人の心情である。吾等のために犧牲となるをも厭はないのが神の愛である。神は物力に現はれ智惠に現はれ又公義正道に現はる、けれどもキリストを學ぶに非ざれば、その至誠至愛の顯現を見ることが出來ぬ。願くは吾等この神をわが父と仰ぎたい。既に神は父として吾等に顯れたる以上は最早此上を

望むべきに非ず、此上の顯現はない。吾等願くはナザレのイエスキリストを信ずることによりて恩愛の神を見、この至誠至愛の顯現に於て神の本體に接したいものである。

基督觀（其之一）

（一）基督イエスの基督觀

其ときイエス答へて曰ひけるは、天地の主なる父よ。此事を智者達者に隱して赤子に顯し給ふを謝す、父よ然り、それ此の如きは聖旨に適へるなり。父は我に萬物を與へたまへり。父の外に子を識るものなく又子及び子の顯す所の者の外に父を識る者なし。（馬太傳第十一章第二十五節以下）

耶蘇基督は何ものぞや

古から、イエスキリストに關する考は決して一樣でない、時代によ

り人物によりて種々に見たのである。今其一班を言つて見やうならば、或時代には、之を人類の考へ及ばざるものとし、之を天上の神とし遠け、遙に之に禮拜を献げて居た。即ちたゞ敬のみあつて親はなく、むしろ懼れ戰ぎて之に遠かつて居つたものだから、自然彼等は別に救主の資格あつてしかも親近し易い他のものを立てゝ、以てキリストに代へることになつたので、マリヤ崇拜は即ちこれである。又或人々は新約書を繙き、親しくイエスの人物に接して、曾て彼等がマリヤに於て理想し渴望せし、仁愛限りなく同情限りなき其德性が、悉くその中に充ち滿てるを認め、之に親むの厚き、精神を以て精神に結ばるをゐた。是に至つては已に死せるマリヤの彫像ではなくて、生けるイエスの人格である、宗教上の一大革命はドーして茲に起るまいか。キリスト我れにあり、我れキリストに在り、我れはキリストなり、といひうるに達した時は、キリストと我れとの

間、已に何物もあらう筈はない、もし其間にはさまるものがあつたならば、そは悉く打破せられなければならぬ。これ實にルーテル等革命家の胸中に炎々たりし熱火である。久しく人々に蔽はれし此生命、一たび彼等に由つて發揮せられた後、多くの人々の認め握る所となり、我等亦數百年の後に生れ、親しくキリストを見、キリストに接するの幸福をにた。しかし吾等凡俗の到らざる、其眼は暗うして彼の大なる光を認めにず、其の手は低うして彼れの高きに達しにず、其器は小にして彼の大なるを容るゝことが出來ないのを殘念に思ふ。けれども我衷にキリストと同感同情になりうるものがあつて、其傳記を讀んで多少の發見するこころないではない、今聊か之を諸君の前に献ぜんとする所以である。

さて予はこれより予が基督觀を述べやうとする前に、先づイエス御自身のキリスト觀を見やうと思ふ。抑もキリストなる觀念は、永く

ユダヤ人の胸中に理想となり希望となつて居たもので、本來王といふ義である。聖書の中にユダヤの名君ソールをキリストと呼んである、否ひとりユダヤの君主のみでない、波斯の大王サイラスに對しても、汝サイラスキリストよといつてある。彼キリストなる辭は、漸次國民の理想的君主を意味するやうになり、彼等が將來に夢想せし黄金時代の王國を支配すべき王其物を以て、キリストとなした。この理想のキリストは、實に立派な人物として舊約書の中に描かれて居る、其姿は時代によりやゝ異つて居て、或は政事家となり、或は軍人となり、或は哲人となつては居るが、一箇の宗教家といふ資格は必ず具ふべきものであつた。

元來ユダヤといふ國は宗教を以て國粋としたのだから、其理想の王は亦從て、神を畏敬し又神を知るの明をも具へたものでなくてはならぬ。又ユダヤの國是は正義であり、其神は正義の神であつて、其

宗教は印度の宗教のやうに無常を知らして來世を冀はしむるのでなく、其神は哲學上考察上の神でなく、現實社會を支配し人類を指導する道義の神であつた。であるから、其國民の歴史は蹂躙、掠奪、屈辱を以て汚されて居るけれども、彼等の確信は尚其中に動かずして、義の王國義の國王を望み且つ信じて居つたのである。否彼等の理想彼等の希望は、彼等が外國の暴横凌辱の下に呻吟すること屢なるに從つて、却つて益其切實なるを加へたのである。そこで自らキリストと稱し、キリストと自任して、世に叫び出たものが、歴史上往々にして現はれたが、悉く失敗に歸して、今は其記臆だに殘らぬ。其中にたゞ一人成効したものがある、これぞ即ちナザレのイエス其人である。彼はひとりユダヤ全國を動かせしのみならず、當時の天下なるローマの大帝國を動かし、しかして今日に至りて尚世界の隅々までを動かすの勢力となつた。さてイエスは果して如何なる點に

ナザレのイエス

於て、ユダヤ人理想の王と自任したまふたか、また如何なる方面で世界の王たることをにたまふたか、これ吾人の見んと欲する所である。

自ら王たる意識

耶蘇自身の基督觀

かのヘルモン山頭、イエスが弟子等を集めて、自己に關する世評を問ひ、更らに弟子等の意見を質したまふや、率直なるペテロは進んで言つた、汝はキリスト、活ける神の子なりと。ユダヤでは王のことを神の子といふ、即位の時、我れ今日爾を生めり、といつてあるのはこの意である。そこで弟子らはイエスを以て、神の立て給へる王たらんとするものとしたのであるイエスは之を妄信として退け給ふたか、否彼れは之を以て眼識あるものゝ言としたまふたのである。當時イエスは尋常平凡の一平民で、其職は大工、其出所はナザレの

片田舍、富はなく、また權力もなかつた。それに弟子等は認めて王としたのは、中々凡俗のよく見うる所でない、尊き所より出た確信であると、彼は嘉し給ふた。是を以て見ればイエスにはペテロの答以前、已に自らかく確信したまふ所があつたに相違ない。さてイエスは何時この確信をに給ふたのであるか。

其幼きや、彼は吾人と異るなき嬰兒であつた、またかの誕生の怪異の如き、一言も其口から出たのを聞かない、初めの弟子等が其說敎に於てイエスのキリストたることを證明したのにも、この事に言ひ及んでゐない。イエスが我れキリストなりとの自信は毫もこゝに根據を有たなかつたのである。故に予も信ぜざるをにない、この自信は初より存したものではなく、何時かその胸中に起り來つたものであると。しかしそれが如何にして起つたか、漸々と夜の明くる如く明になりしか。又は忽焉眼の醒むる如く判つたか、それは今論ずる

所でない、兎に角、彼は如何なる根據に由て之を覺識たまふか、といふのが問はんとする所である。

耶蘇が口を啓き給ふたより、口を閉ぢ給ふたまで、即ち其傳道の最初から十字架上の最後に至るまで、常に存した意識は、天地を主宰し給ふ大能の神を、己が父と呼び給ひしことであつて、これ實に驚くべきことである。ユダヤ人の宗敎思想に據れば、この神は恐れを以て對すべきもので、決して近くべきものではない、それで後には直接に神の名を呼ぶことを憚つて、天とか主とかいふ文字を用ひた位であつた。されば神と人との間には、多くの天使があつて交通の媒介をなすとは、其神學の敎ふる所で、直接に之に親近するなどは以ての外のことである。此思想の中にあつて、天地の主を直に我父よと呼びたまふ其意識其情念は、如何して起つたのであるか。兎に角、天地の間最も近く最も親しき其關係が、彼れの情感の中に現は

罪の觀念は神と人とを隔つ

れて來た、明確にあらはれて來たのである。これは單に一箇の冷かなる悟ではない、止水明鏡の上、物影の映せる如きものではない、實に情念最高の活動にあらはれ來つたものである。

神と人とを隔つるものは罪惡の觀念であるが、此觀念は最も強くユダヤ人の中に感ぜられたので、彼等には嚴然たる道義の法則が、客觀的に法律の明文として與へられて居て、之に協はない行爲をすれば、忽ち神の罪人となつて容易に其光を仰ぐことが出來なかつた。これユダヤ人が神を敬畏する丈け夫れ丈け、神から遠かつた譯である。かの世界の一大偉人たるパウロ、非常の鍛錬修業を積んだ彼れパウロも、この嚴然たる道義の法律の前には、噫われ願ふところの善はこれをなさず、却て願はざるの惡をなす、ア、われ困苦める人なる哉、この死の肉體より我れを救はんものは誰ぞやとの嘆聲を發せざるをになかつた。

神子たる意義の基礎

イエスは理想的基督の人格的實現なり

しかるにイエスの胸中に充ち〳〵た道義の念は、一も罪惡の觀念に責められることなく、仰いで神に對し爽快を感じ親愛を感じ給ふたのである。眞の樂天は眞に天を父とするところにある。さてユダヤ人が恐れ戰いて居た其正義の神に對し、我父よと呼び給ふ意識が彼れの衷にある、そもこの意識は何ぞや。イエス亦自ら問ひ給ふた、そもこれは何であるか、ユダヤの國民が、はた其預言者等が未だ感じなかつた此情感、そもこれは何であるか。「父の御意旨をなす、これ我食なり」、と顧ふ至誠の情感は則ち孝子の至情ではあるまいか。ユダヤ人の歴史的理想の王は、こゝに人格的實現を見たではないか。しかり彼は自己を以て其理想的天子となし、其希望のキリストと認めざるをになかつた。これは人が賛注ぎ、民が稱號して附した人爵ではない、自身自身の人格に具はる天爵の王である。馬蹄劍影の下に萬國を征服する將軍ではない、富貴榮華を一身に集むるシーザー

ではない、神を父とし人類を兄弟とする、正義博愛の化身である。其王はよし身に襤褸を纏ふとも、麁とパンとを食ふとも、矢張天子である。天と地との間に於て我れは天子なり、とは動かすべからざる彼れの確信であつた。これナザレのイエスの基督觀、此非常なる意識一たびイエスの中に發し來つてや、何物かよく之を奪ばふ。かの千古の悲劇たる十字架上、民衆には捨てられ、友には賣られ、弟子には去られ、遂に自らさへ吾神〳〵何ぞ我れを捨てたまふやとの叫を發したまふに至つても、此神子たる確信は動かなかつたのである。「我靈を爾の手に委ぬ」、とは、またこれ彼の洗禮をうけて水より上り給ひし以來常に聞き給ひし、「これ我心に協ふ我愛子なり」との聲に對する反響ではないか。艱難、困厄、屈辱、失躓、襲ひ來り壓し來り、碎いて又之を碎くも、尙滅却する能はず、却て之れにより益〳〵其光を發揮し來るものは、其神子たるの意識が單に觀念の上に存するでなく、彼れ自身の人格をなすからである。

イエスは人なり吾等の同胞なり

基督は吾人の生ける救主なり

驚くべきこの意識は誰の意識ぞ、忘るべからず、これナザレのイエスの確信である。彼は天にありしものが、一種奇怪なる誕生により、地上に出現したのではない。彼れには肉があり血が通ひ、涙もあれば笑もある、呱々と泣いてマリヤの懷に乳を求めた嬰兒より、智慧も身體もいや成長せし、立派な人間である。彼をして神たらしめよ、そをして地上に一時の宿をなして、圓滿の人格を現じ、完全の生涯を送り、遂に復た天の一方に雲がくれたるものたらしめよ、それが吾人に何の深い關係が有るか、吾人が彼れに於て切つても切れぬ深い密なる緣の存するは、彼が一個の人間であるからのことである。神の一位を占むる、本來已に神たるものが地に來つて叫んだ

のではない、人類の一人が叫んだのである。吾らは未だ叫びにない
が、人類の一人が吾等の中よりして、吾れは神の子なりと叫びたま
ふた、天地の主を我父と叫び給ふた。これ神を仰いで近く能はず、
身を顧みて泣く人の子に取つて、どうして天の福音であるまいか。
更に一つ、ナザレのイエスは我れはキリスト王なりと叫び給ふた、
これ忘れてはならぬ。パウロがいふた、我れキリストと共に苦をう
けなば、また彼れと共に王たるべしと。抑もこの人類は万物最高の
發達を遂げ、最高の能力を授けられ居るにも不拘、却て外物の支配
をうけて其桎梏に呻吟して居る。吾等は罪惡を憎み賤む、しかし吾
らは罪の下に賣られたるものゝ如くに、之れに屈從して居る。万物
の靈長たるべき人間、どうしてこれに安んじやうか、ストア哲學の
人々が外物の刺激よりくる情感を斥けて、万物の上に超然たる地位
を占めやうとしたのも、佛教の僧侶が出家入山して煩惱以外の別天

地をこゝに享有しやうとしたのも、皆これ人類憧憬心の現れてなか
らうか。然り人類は王たらんとして歎きもがくものである。所が、
イエス曰く我れはキリストなり我れは王なり、我已に世に勝てりと。
さうして彼は獨り自ら其地位に坐し、吾等をして其前に奴隷の如く
事へしめんとしたまふのでない。我れは王たりと叫びたまひしイエ
スは、吾人々類に——税吏罪人に對し、十字架上の盜賊に對しても
——我れに從へ、我れに來て我と偕に居れと宣たイエス、已に世に勝
ちて王となり、恐るゝ勿れ來れと宣ふた、これ實に人類の大福音で
はないか、人類の一人が勝利をえたのである、
人類は自ら救たのである、人類の地位本分が全うせられたのである。
さて、しからば如何にしてこの勝利はえられるか、如何にしてこの
微力なる吾々に、かの強大なる力が現はるゝか。外ではない、天地
の主にして宇宙に滿ちたまふ全能なる神と一身同體になるのである、

我れ神にあり神我れにあるといふ地位に到つて、始めて人たるの地位本分を全うすることが出來る。これイエスキリストの實驗で、また吾人彼を信じ、彼に依り、彼に結ばるものゝ實驗する所であろう。今日まで人類が敗北に敗北を重ね、罪惡の下に蹂躙されて居る數千百年の歴史は、神より離れて孤立てやらうとするからのことである。本來我等は神から出で居るものではないか、神に根本を有するものではないか、其根を切り其本を離れて、どうして生きて居られやうか。ナザレのイエスが王たりし秘訣は、彼が神の子であつたからである、切ても切れぬ、生ぬきの親が存して居たからである。

人類に對する、博愛の精神はまた茲に源する。人に仇され、友に賣られ、遂に千古の辱をうけ給ふたけれども、なほ博愛の至情混々として注いで止まず、暗憺たる逆境の中にも鮮血迸る中にも、なほ樂天の境涯、勝利の喜を有したまふたのは、其根本生命を神に有したからである。神の中に生き、神の中に動く、これナザレのイエスがキリストたる品格を保ちし秘訣である。

彼のスピノザは神に醉へるものだとノベリスはいふたが、予は切に望む、我日本にもこの神に醉へる哲學者の出でんことを。今日の哲學者は何だ、高山君をして博識なる講釋師と呼ばしめたもの、これではないか。今日の倫理學者は何だ、パンを與へずして石を與ふるものと呼ばしめたものは、これではないか。否今日の道學先生は、時に或は蛇、蠍を與へぬとも限らない。これ或は矯激の言であらうけれども、また現代學風の弊に對する、青年學生の叫を代表したるものとせられまいか。しからば吾人何處にかパンをに、何處にか生命をにやう。凡そ偉大なる人格の力は時と處とを超越するものである、一隻の眼を具へて之れに接するに至誠を以てするものであれば、如何に時と處とを距てゝも、其感化をうけることが出來る。もしこ

れがないならば、たとひ共に食ひ俱に寢ねても、何の感化、何の生命をうけやうか、偉人は彼れに凡人のみ、生命の力は彼れには物いふ骸骨のみ、徒らに偉人の出ないのを歎くな、偉人はそうビヨコビヨコ出るものではない。しかも万古の偉人は已に活くるではないか、二千年來活きて益其力を大きくしつゝあるではないか。靈と誠と愛とを以て之に結合せよ、直に神より出づる彼れが生命の泉は、又汝の腹の中に湧き出でんかな。

基督觀（其二）

（二）基督の神性

基督は人なり

吾人が前述べたる如く基督は眞に人である。而して基督が只血肉の構造に於て吾人と類を同うしたるのみならず、吾人と同じ情同じ魂を有して居つたといふことは、人類に取りて此上もない福音である。然るに吾人が基督の人なることを唱導すると、世の人稍もすれば眉をひそめて云ふ「然らば基督も亦不完全な罪惡に浸んだ人か」と。即ち基督を人だといふことは基督の爲人を引き下ぐるものと斷定するが常だ。斯くの如きは畢竟人といふ觀念低きの致す所で、人と云へば直ちに己れを本位として考ふるの弊に陷つたのである。人といふは元來そんな低いものではない。ことに基督生れてよりは始めて人といふ高い意味が明になつて來た。今若し諸君と南洋に赴き所在の蠻人を研究し、或は石片土塊によりて石器時代の社會を推想したならば、吾人は人なるものを如何いふものと考ふべき、思ふに禽獸を去ること甚だ遠くあるまい。之に反してダルウヰンスペンサーバックスレーピスマークグラツトストンルーテルツキングリ等の事蹟を見

て而して人を定義せん乎、實に夫の南洋人を見て下したる定義とは雲泥の差なきを得まいと思ふ。兎に角何れも等しく人であるけれども石器時代の人を標本とするか、又は上掲の人傑を標本とするかに依つて人の意義に大差を生ずるのだ。是れ吾人自ら人にして而かも人なる辭の意義惑ふ所以である。今吾人が基督を人なりといふは「基督の人」といふ意味である、即ち基督の如ぎ人格にして始めて人なる自家の定義を解明し得る所の其人である。人なる辭に如何に高い清い廣い深い意味あるかは基督でなければ十分に知ることを得ぬ。獨逸のローテーは人といふことを考ふる度毎に嚴肅の感に堪えずして自ら戰慄したというて居る。斯かる人の人觀は如何に尊いものであらう。吾人も亦自ら退いて人とは何ぞやと自問自答せざるを得ないのである。

基督の神性を論ずる所以

抑も宇宙の洪大を想ひ廻らすときは吾人々類は實に蒼海の一粟にも過ぎない、にも拘らず此小なる人間が宇宙の大經綸を批評し、或は自ら之を疑ふとは何と壯觀であるまいか。吾人が眼を開けば吾天地の中に在り、眼を閉づれば天地、吾の中にありと喝破して、方寸の中に至大の天地を包容した見識といふものは中々偉いものである。尙進んで此洪大なる宇宙を踏臺とし之を支配するの權威を以て世に立ち給ふたイエス、キリストに至ては吾人更に大に驚歎せざるを得ない。熟々キリストの有樣を見るに吾人は此人に一點の汚れを見出すことを得ぬ。淸い完全なる人格を有せらるゝ方であつた。殊に其宗教的見識に至りては天地の衷情を穿ち見るの明を有し、其間に一片の障碍だにない。基督の眼は宇宙を照すの光であつて、實に天地の奥底

基督は人類の好標本也

を洞見して居る。而して此人が實に吾等の中に生活し給ひ、吾等と同情同感を有し給うた人である。此意味にての人といふとは吾人の信仰の出立點である。

古來此世界に二つの大なる思想がある。一は希臘に發達し來つた人といふ思想である。人を根本として萬事を決した。二は猶太に發展した神といふ思想である、彼等は天地の上にこの世を汚しとする正義聖潔高大なる神あるを確信して居つた。此二つの考は獨りユダヤ|ギリシヤのみでなく爾來多くの人心を支配したものである。抑も神は吾人の及ぶ所でなく、人には固より限りがある、去れば人と地との間には大なる懸隔のあつたのを、遂にイエス、キリストの人格によりて二者圓滿に調和合致したのである。そこで基督によりて本當の人といふことは分つて來た。基督教は此世に人といふ正當の意味を明にしたものといはねばならぬ。此本來の意味を以て云ふときは

神性の證明

吾人の基督觀は「基督は人なり」の一言を以て盡きて居る。けれども通常世人の抱ける人なる觀念は稍低いのである、此低い考では基督の人格は分らない、是れ吾人がキリストの人格を說くに已むを得ず基督の神性といふ文字を用ゐざるを得ぬ次第である。

神性とは神たる性質のあることは基督の自覺せし所であつて吾人も亦認めざるを得ぬ所だ。本來人にはすべて神性あるべき筈で、只之れが基督に於て最も明となつたのである。何に依りて基督に神性のあるを見るか。或人は基督の奇蹟を以て其證明とする。或は處女マリヤより生れたといひ、或は海波を蹴り風浪をいましめたといひ、又或は死後三日にして復活したといふ如きは神に非ずして誰か之を爲し得やう、是即ち基督の神性ある所以といふのである。併し諸君は之等の事に依つて神性を認むることは出來難からう。又或人は曰ふ舊約の豫言は應ずる、

是神たるの證だと。之も十分に是認し難い。之等の證據に依らずモット深い證明はないかといふに、吾輩は茲に二つを擧げたいと思ふ、一は基督の道德的品格であつて他は父なる神の意識である。

基督の道德的品格

先づ基督の品格を見るに、其立派なること實に生れ乍らにして罪氣のない人と云ひたい程だけれども之れは斷言は出來ぬが、既に三十にして世に現れたときの人格を見るに實に清く深く又誠に高大なる理想を有つて居つたことは疑がはれない。何んとなれば基督はあれ程の人格であつて猶自ら善を以て許さなかつた、「よき者は只一人、神なりと云はれて居る。其胸中如何に尊い理想を有せられしかゝ察せらるゝ。けれども基督は此いと高き善の前にあつて如何なる態度をとられたかといふに、決して修養の至らざるを慨するの聲を發す

るともしなかつた、又パウロの如くアヽ吾惱ある人なる哉とも苦悶しなかつた。絶對的善を以て自ら居り給はずして而かも基督には罪に苦んだ跡はない、如何に其境涯、其品格、其道德の觀念の清く高かつたかを知るべきである。

先づ今義といふことを考ふるに古は掟に叶ふを義といふたが、基督に至つては此定義を一變した。德を以て怨に報ふ即ち敵を愛することを義だとした。限りなき仁愛の情をよせて敵の汚れたるをも憐み、一身を拋ち肉も骨も血も之に與ふるが義だといふに至ては、基督の胸中義の觀念の如何に清く高きものあつたかを思はざるを得ない。而かも其清いといふは汚れより聖別しての義をいふでなく、却て汚れの中に入り之を取り去て仕舞ふ丈けの積極的の力をいふのである。基督の清い高いといふのは消極的ではない。善を愛して惡を避くるの清きに非ず、汚れを去り不義を滅して罪人を救ふことに熱中する

積極的の力の清きである。愛と義とは基督に在りては二にして一だ、兩立ではない。基督より見れば敵を愛すること是れ義である、「神は義しきが故に吾等の罪を赦し給ふとあるではないか。此道理は古來人の了解に苦しみし所であつて、例へばかの馬太傳第一章に「ヨセフ義しき人なるが故に私かにマリヤを離縁せんと思へり」とあるを註釋するに苦しんだのも畢竟これだ。彼等はヨセフにして義しき人ならば公然と離縁すべき筈だと思つたのである。けれども義と愛の二にして一なるを知らば、私に離縁せんとした心情を察するに難くない。而して此義、愛の合一は基督の人格に於て始めて現れたのである。我國では古來義理を語るときは人情なく、二者甚だしく苦鬪した。基督に在ては二者即ち一である、之は論證ではない、基督自身の行に發して此事を明にしたのである。然らば何に依りて之が基督の人格に現れたか。そは若し基督にして在來の人類の平面内だけに限らるゝ者ならば單に其れ丈けであらう、けれども基督は天地萬有に充實せる只一人の神、絶對の善が宇宙の中心となつて居ることを信ずる の念があつて、聖の聖なる神と基督とは本來結ばれて居つた。此連絡こそ實に基督の人格を作つたものである。見給へ品川沖に潮滿つるときは隅田川の大流も其逆寄の勢に抗し得ぬではないか、是れ品川の海が世界を圍繞する太洋と連絡するの結果である。基督の性情には思ふに永遠限なき神の靈氣と相結て一毫の障碍がない、此神の靈氣の勢が其心中に活動するのだから其人格も到底淸からざるを得ない。基督の神性とは即ち此關係をいふのである。

一體人といふことには二つの方面がある。一は吾人の目に見ゆる石器時代より進化する方面の人である。併し何處まで進化するものか分らない。南洋の蠻人と雖も將來プラトーよりも大いなるものを輩出せないとも限らない。抑も一升の水は固より一升の力しかない、

若し之が一斗一石の勢力を有するに至るとすれば、元來一石のものを有して居ると見なければならぬ。今人間の進化の窮極を想像するときは人間なるものゝ裏面には之と結べる神あるを見ざるを得ぬ。是れ第二の方面である。去れば人間には將來がある、未發のものがあるのである。是れ即ち神の中に藏るゝ所のものだ、吾人は即ち此藏るゝ力を認めなければならぬ。而して此力我にもあり得るのである。之を吾人の品格の中に又吾人の宗教の中に入るゝと入れざるとは大なる差を來すのである。見よ此力を入れず道德のことに心掛けぬ時は禽獸と相距ること遠くない。若し此力を入れ道義性に結ぶときは、本心の聰明を增し、吾れ知らず天外の聲を聞くを感じ、遂に神と結ぶに至りて德修まり品格高まるを實驗するであらう。此宗教に入らずしては如何に修養しても坂に車を押すやうなものである。幾分かは進むであらうが、結局骨折のみ多いことだらう。且つ作爲

多く言動に天眞自然の趣がない、我慢でやつても到底不十分なるを免れない。然れども一度神と結び宇宙天地と關係ある方面を開拓するや、吾人修養の道に於て意の如くなること水の低きに就くが如くであつて、而かも向上して進歩すること火の炎々たるが如くである。思想も慾情も野心も皆限なく清けき自然の活ける神に向ふて止まない。從來は少しばかりの功名に誇つたものが、之よりは無窮なる神に結ばるに非れば榮譽とし功名とせざるに至るであらう。是に於て吾等の中にも亦神性ありと云はざるを得ない。此方面は實に開けば開く程益々高いものがある。此實驗を推しあてゝ基督を見るに如何に高いものありしかを想像することが出來ると思ふ。基督の品格の高く清い所以は基督が神に任せ神に向ふた點に存する。基督が神の中に生活する丈け神も亦基督の中に生活し、又それだけ基督の品格が高いのだ。基督の道義的品格の根さず所は即ち神であるのだ。

父なる神の意識は即ち神の明性なる也

父なる神の意義

併し道義的品格より更に大いなるものがある。何ぞやといふに智識である。吾人は基督に於て最も潔白な智識を見る。是神を認むるの智即ち天地の神をわが父なりとするの意識であつて、從來世人の開く能はざりし所のものである。今でも人の多く悟り得ぬ所であつて、この福音ばかりは吾輩も之を世人に分ちたいと欲する。基督は神の子で神が基督の父だといふ如く、吾人と神との間にも斯かる親子の關係が成るを得ば、吾輩の願望は達するのである。吾輩は此の外に説くべきものを有たぬ。此親子關係の意識が基督に尤も明白であつた。基督は何故に此明白なる智識を有し給ふたか。是れ基督の性情の中に神たるの働きがあつたからである。英雄にして始めて英雄を知る、子を持ちて始めて親の恩を知る、類似のものにして始めて類

似のものを知るべきである。吾輩は基督の本當に神を己れ及び人類の父だと明白に知り給ひしは基督に所謂神たる所があつたからであることを疑はない。基督に神たるものなくんば神は即ち基督に取りてはストレンヂヤー(見も知らぬ他人)である、斯くも神を見ること明白なりしは其中に神の靈ありしを以てゝある、神と類を同うせし所あるだけ神を明にしたのだ。否基督は神の像そのものであつた。活きた神の實体が基督の中に在つたのである。神を知るは神心である、神心なくんば誰れか神を知るを得やう。是れ吾輩が基督の神性を主張する所以である。

併し斯かることを主義するは全く吾人の經驗に徴する所ないではない。吾人天地の神を感じ神を考るに當り、若し吾人に神らしき所なくして何んぞ神のことを知り得やう。五尺の軀のみでは神を知ることは出來ない。只吾人に神の俤少してもあり且發達し始むれば無聊

にまで至ることが出來る。神のことは勿論よく分らぬ、只漠然近づき得るのみである、けれども吾人の精神の働きは非常に進み得るを以て神のことも段々に分るのである。境涯の高くなるに從て神のことも能く分つて來るのが吾人の實驗である。基督に神のこと斯く明白に分つたのは其れ丈基督に神たる所あるからである。

基督が神を認めしを見るに單に主宰者とか造物者とか又は大能者とが教へしにあらず、基督は實に人類の父として吾人に神を示し給ふた。人類はみな神の子である、わが同胞である、敵と雖も愛せざるを得ない。基督が敵を愛するを以て義となし、自ら罪人や稅吏の友となりし所以も之れである。この同胞を愛するの心は實に親心である。基督には人類の親たる心が有つたのである。彼れが十字架に懸つたとき始めて基督の愛を知るのは遲い、山上で教を垂れしときも、淫賣婦に面したときも、日々夜々に十字架にあつたのだ。基督自ら

も日々十字架を負ひて吾に來れといふたではないか。世の中で父母の子に對する至誠は實に偉いものである。汗水を流して貯へたる數十万の財産も一人の馬鹿息子に與へて顧みない、七十まで骨折つて取つた天下を家康は子に與へた。財産のみでない一切を子に與ふるといふ至誠を父母は有つて居る、子の生長を見ては自己の老ゆるをも知らぬ、自己の生命そのものを子の生命に移すのである。然れども基督の親心は更に大きい。其の與へんと欲するものは肉でない血でない、自己の限りなき衷情其ものである、品格そのものである、ホール、ペルソナリチー(全身全情)そのものである。此心あるから基督は神を解し得たのである。神が吾等の父であることは基督にして始めて分る所である。去らばこの智識のある丈が即ち基督に神たるの性情が有つたことの證據である。是れわが基督の神性を信する所以である。

基督の人格と吾人の修養

此神性を有し、天の神を父とするを得た彼は抑も何者か。天使か、然らず。天地を主宰する神か、然らず。人である。吾等と類を同うし飲食を同うし世界歴史中に現れた人類の一人である。人の中に神と性情を同うし類を同うし、神の様な親心を有した者のあつたとは吾人に取りて如何に喜ばしき福音であらう。既に基督に此性質の完全に備つて居つたことは、人類も亦神たるを得るの端緒ではあるまいか。不完全な云ひ方だがヒューマニテー(人性)がディファイ(神化)さるゝ始めと云つても宜からう。基督が神性を有する丈け人類も神たるを得るといふべきである。是ぞ吾人々類の幸福の定まる所である。もし基督にして天使たり神たりといふに止らば、基督世にあり人に對するや全くストレンヂャー(あかの他人)である。人類と何の關係

もあるべき筈がない。けれども彼は人である、故に基督は人類の救はれたる始めをなし、從て世の救主である、世界の人類は基督によりて既に神と結ばれた、神ヒューマニテチー(人性)の中にありヒューマニチー(人性)が神の中にあるの事實は基督に依つて明白となつたからである。吾人と雖も基督を信するとに依つて神と結ぶことが出來る、吾は即ち葡萄の枝である。只幹たる基督より離れざらんことを務めねばならぬ。幹を離れて枝は生長することが出來ぬ、基督に結ばざるものは固より神と結ぶことを得ぬ。直ちに神に結ばることは出來ない、一人の仲保即ち吾人の同類たる基督によりて神に結ばり救を完うすべきである。

諸君銘々の中には必ず未發の神性がある、之を發揮して限りなき神と生活することを得ぬのは眞に殊念ではないか。願くは速かに基督を信じ基督と同心一体となるの境涯に入り給へ。此決心をなして基

督に結ぶは嫌ふべきことでない。同類の人に結ぶのである。斯の如きは是れ吾輩私の願に非ずして寧ろ諸君の本心に訴ふる神の聲である。今神は諸君を呼び給うて居る。之を避けて何處にか逃れんとする、つまり神の懷に入るの外はないではないか。萬有はすべて神のものである。神を外にして樂園はない。寧ろ速に決斷して基督を信じ神の子となられんこと、吾人既に神を信ずるものゝ心から願ふ所である。

人格の感化

基督復活の内容

復活問題の必要

吾れ熟々人の道に入るの始めを察するに、多くは宗教其ものに感服せるが爲めなるよりも、寧ろ道を傳ふる者の熱誠、眞摯、元氣、確信等に服し、所謂人格の感化を受けしに基くものが多い樣だ。之を過去の史跡に徵するに、宗教の相傳するや、以心傳心なるよりも却て人格より人格に相及び、清くして大なる人格はまた清くして大なる人格を生み、彼と此と相結ばるゝに依りて發達せること多きを見る。蓋し吾人の理想はキリストと云ふ高大なる人格に在る、之を中心として多くの人々を感化し一の新なる社會を作るを目的とする。是れ所謂神の國である。基督教は實に人格的宗教である。人格を重んするの點は慥かに基督教の他教に勝る所である。天に在りては神の人格を認め地に在りてはキリストの人格を認む。人格の感化によりて多くの人の道に入るのは、決して怪むに足らない。

教理の怪奇

然れども人格は教理ではない。人格に感激すればとて常に必ずしも教理に迄服從するものでない。往年、故岩倉公大使として歐米を漫遊し、其巡回記に記して曰く、吾等諸所の堂會を見るに集るもの多くは中等以上の紳士なり。而して牧師之に向ひて說く所或は天の聲

と曰ひ或は天開けて聲ありと曰ふ其言の何ぞ怪なるや。尚ほ更に怪むべきは之を眞面目に聞く紳士諸氏の心にぞある」と。夫の歐米の文物に心醉せる岩倉公其言を聞て怪むこと斯の如くである。牧師傳道者の人格の優れたるを以てしても其說く所の往々にして怪奇に陷るは珍らしいことでない。一旦道に入るの決心をなし、其敎理を聞くに及んで茲に之を怪み之を疑ふもののあるも蓋し不思議とは云はれない。況んや敎育ある青年に於てをやだ。

初めて道に志し其敎理を研究するに及んで起り來る疑問少くないとせば、「基督の復活」の如きは慥かに其一であらう。而かも復活のことや實にキリスト敎の最大要點をなすもので、之を握ると之を握らざるとは即ち吾人運命の岐るゝ所であるから、吾人決して之が研究を等閑に附してはならぬ。吾人今こゝに其內容に就て研究する所あらんとするものは、只諸君の疑問に答ふるが爲めのみでなくして、其

が專ら人格問題に大なる關係を有するからである。

復活なる觀念の基礎

抑もこの甦生といふ思想は正義を確信する精神より出たものだ。夫れ天地萬有を主宰する神は生ける正なる神にして道義の根本である。故に神は必ず善に福して惡には禍する、其間一點の私情あるべからずとは猶太人の特に明に認めた所であつた。支那人も亦やゝ之に近い思想あつたけれども彼は之を說くに名といふことを以てした。偶々楊子の如き反對の說を唱へたものもないではないが、一般の思想は美名の万世に傳はるを以て上天の賞典となして居た。我國も亦此思想の影響を蒙り、所謂人は一代名は末代といふ裡に天の賞罰を認めた、猶太人は即ち名を以て滿足しない、名は生命そのものでないからだ。現世に於て國家の大義に殉せし人、若し得る所只名のみば

かりとせば。如何に不權衡なことだらう。又彼等は正義は遂に勝たざるべからずと信じた、世は必ず遂に正義の國とならんとは毫も彼等の疑を容れざりし所である。而して神の國は義人の住む國である。神の國出現するに及んで、人は全く義人の福樂を享くることが出來る。於是彼等は、累代神國建設の爲めに身を殺した多くの義人は如何になるだらうか、彼等は此神國の福樂に浴することが出來ぬだらうかに考へ及ばざるを得なかつた。是れ甦生の思想の起りし所以である。義のために殉ぜしものは此處に復び甦生て、永しへの福樂をこの正義の國に享くるといふのである。要するに、彼等の信仰は正義は死すべからずといふにある。神は永遠の生ける正義である、正義の精神にして天地の本體ならば、正義を宿せる人間は如何でか死滅することを得やう。彼等叫んで曰ふた、「爾神は永遠より永遠に活き給ふ、吾等死ぬべからずと。何ぞ其確信の雄大なるや。而して斯の確信は

キリスト在世の當時猶太人中に頗る盛であつたものだ。然れども彼等は猶未だ甦生を以て天國出現の時に於て、即ち遙遠なる未來に在るものと信するに過ぎなかつた。

基督の復活

然るに茲に新なることが起つた、キリストの甦生即ち是である。そもく〳〵キリストの甦生に就ては古人も大に力を入れて論ひ、甦生を信して始めて救あり、之を信すると信せざるとは運命の分るゝ所だと信じて居たものが多い。併し之れは未來有無の論ではなかつた。正義の人に未來あることは彼等の疾に信して疑はなかつた所である。甦生論と未來論との區分は當時尤も明であつた。然り而して未來を確信するの輩が特にキリストの甦生に議論を戰はしゝ所以のものは、キリスト果して義人なりや將た罪人なりやを疑つたからである。當時

の猶太の國會は、キリストを大なる罪人なりと議決して之に死刑を宣告した。若しキリストにして甦生せざらん乎、神は國會の宣告を是認し給うたもので、キリストは依然として罪人たらざるを得ぬ。若しキリストにして甦生るとせん乎、國會は之を罪人と宣告せるに拘らず、神は之を否認してキリストの正義を明にし給ふたものといはざるを得ない。若し夫れキリスト死して忽にして復活せりといふに至つては、神が如何に國會の議決を飜してキリストの正義を認むるに急なるかを想ふべきである。キリストは果して義人であつた、そは甦生したからであると彼等は信じた。キリスト義人なりといふ一事は實に凡ての信仰を生かすものである。人も國會も將た天も擧てキリストを罪人と認めん乎、最早キリストよりは何ものも起るべき筈がない。キリスト義人なりといふに至つて實に起り來るもの多々あるのである。

そも義人たるキリストが何故に十字架に殺されしか、是れ大なる問題である。パウロは自ら「十字架上のキリストの外述べず」とて此問題のために一身を捧げ、其十字架の意義を説くを以て終生の能事とした。斯く十字架を重視せし所以のものは必竟義人の死なればである。彼遂に之より大なる眞理を發見し、自ら十字架の福音と稱して之を天下に呼號した。要するに甦生はキリスト、イエスの上にとりての大なる關係である、一體キリストは自らの罪あるを感じなかつた。一天かき曇り十字架上に最後の息を引いた時、キリストの自らを解する所果して如何。主自ら曰ふた、「我は殺さるとも三日の後に甦るべし」と。三日とは忽ちの意である。忽ちにして甦るといふと、是れ古人の考へ能はなかつた所である。バプテスマのヨハネすら終りの日に至りて始めて甦生ありと信じて居た。キリストが自ら三日にして甦ると斷言せし所以のものは實に彼れに其不死の確信があるから

だ。不死といふも科學研究の結果に非ず、靈魂不滅の議論でない。それキリストが三十三年在世の間を一貫せるものは、彼と天の神との離るべからざる親交である、神と一なりとは實に彼れの純粹なる心情であつた、死とは何であるか、神と己れとの親交を絶つことでないか。如何なる迫害に遇ふもキリストの神に恃む心は固い、キリストの神を慕ふ心の厚きが如く神の恩愛はキリストの上に限もないのである、彼れは死すとも此親交のきづな絶たれて神の愛わが身に消ゆるとは、到底彼の考ふる能はざる所であつた。假令死來りて「神と吾とを離間せんとすとも、吾は到底永く茫然として在るべきでない、必ずや忽ち復活して再び神とわれとの聖なる關係の裡に生活せんとは、キリストの確かに信じたりし所である。是れ古への預言者の到底考ふることの出來なかつた所だ。

更らにキリストの甦生に關する思想を探るに尙一層深遠なるものが

復活は理想的最高生活に入るの門也

ある、彼は甦生を以て高尙なる神の生活に入るものとなした。甦生の生活は此世界の生活よりも高い、世界の生活は之に入るの準備である、更に高等なる、完全なる而して心靈的なる生活に入るは即ち此の甦生に依る。故にキリストは「復活の子」は「神の子なり」といつた。神の子たらんことは人間最大の理想ではないか。此完全なる神の子たる世界に入るを甦生といふのである。是に至りて甦生は實に望ましきものである。若し甦生の意義にして只現在の生活を再びすといふに止らしめは、其のうちに何等か高尙なる思想はなからう、けれども更に之を高尙なる生活に入るの意義とせば、其うちに實に無限の趣旨あるを覺ゆる。甦生の望ましき所以は茲に在るのである。而して人高き生活に入らんとせば須らく低き生活を捨てなければならぬ、「之を失ふものは之を得」るとは之をいふに外ならない、「十字架を負ふて來れ」といふも外の意でない。高き生活のために低きをすて現

復活論の價値

世に死して高尚なる榮光の世界に生きんとするが即ち彼の大なる希望である。去ればこそキリスト死に給ふとき悲慘の中にも亦自から風姿從容として而かも心に平安と喜悅の溢れて居たのである。

復活の内容

甦生とは此高き世界に入るといふことの記號である。キリストの傳を見るに、彼死して墓に葬られ三日目にして甦生れりというてある此記事や甚だ解し難く、或は肉體を意味する如く、或は之を意味せさるが如くにて、多く人の迷ふ所である。然れども之は甦生の形骸のことだ、毫も内容に關係する所はない。よしやキリストの甦生が物質的の意義なりと定まるとも、其精神其内容に至ては爲めに損益する所あるべきでない。正義は遂に勝つべく、神は永遠に活き給ふが故に神と共なる者は死することなくして、更に高等なる生活に入

其信者の甦生の確信

るといふ大思想は、甦生の物質的たると精神的たるとに依りて左右せらるべきものでない。肉體の甦生なりとは考ふるを得すといふのは形骸の論である。形骸の論に迷ふて躓くは抑も愚で、之に拘泥するも亦迂である。是處に疑あるものは唯自己の安んずる所に止りて可い。要は只其末を捨てゝ其本を握るに在るのみである。本とは何ぞや。其精神其内容即ち是だ。此甦生の精神に接して始めて吾人は得る所あるを覺ふるものである。

キリスト信者とは何ぞや。キリストは神の子にして天より來り十字架に死し三日目に甦れりと叫ぶ者未だ必ずしも吾が所謂信徒でない、眞にキリストと一心同體となり、キリストが正義の神と結はれし如く、正義を自己の根本としてキリストに結ばるゝもの、之をキリストを信ずるといふ。キリストが十字架にありて「吾は死せず」と確信せし如く、如何なる迫害に遭ふも正義なる吾は死なずとの確信は、實に

信者たる所以の根本である。唯夫れのみにあらず、信者たるものは正義の最後の勝利を信じ、又此主義の世界に勝つべきを信じて、滿腔の熱心を以て突進する者である。夫のパウロの悟りし所亦實に之れであつた。パウロがキリストの甦生を重んすること實に甚しきもの蓋し其故あるや。彼はキリストを信じた。キリストにして甦生せざらんか。彼も亦甦生することが出來ぬ、キリスト甦らざらば義者はすべて甦り得ざればである。キリストの甦生を主張するは即ち彼自らの甦生を希望する所以である。故に彼は甦生を確信して十字架を負ふた、十字架を負ひてキリストに從ふた。キリスト信者となることは即ちキリストと共に十字架につけらるゝことである、現世に暇乞することである、キリストと共に新なる世に入ることである、而してキリストに從ひて靈の生活を營むことである。是に於てかパウロはキリストと一心同體にして共に神の中に生くるものと云はなければならぬ。

基督を信ずるは即ち復活の生活に入る也

約翰傳を見るに當時の人が甚だ敬虔なりしことが分る。この書の記者は明に現世の中に既に甦生あるを認めた、之を甦生の命といふた。其第十一章マルタとキリストとの問答を叙するの條に曰く、「我は復生なり、生命なり。我を信ずるものは死るとも生くべし。凡て我を信する者は永遠に死ることなし」と。キリストを信するは即ち死より生にうつることだ、死るとも復生す、眞にキリストと共なるものは限なく死ることがない。是れ豈甦生の生活に入るものではないか。心よりキリストを信し、靈のキリストと同心一體となれるもの、之れ甦生の生活に非すして何であらうか。甦生の事實は最後の日を俟ちて存するのではない、今日キリストを信じて乃ち復活がある、以て吾人の生命は更に活動して止まさるを得る。ヨハネが甦生の精神とせし所は是だ、パウロが「汝等はキリストと共に甦りしものなり」とい

へる亦是に外ならない。キリストの甦生は誠に吾人信仰の根本基礎である。只必ずしも形骸の之に伴ふものとしてはならぬ。人或は形なしには分らずといふものもある。キリスト肉體を以て天に上れりと信じて疑はざるとも、猶形骸のうちに眞理を把持する以上は何の不可もない。要は眞理生命に在るを忘れてはならぬ。又或は形骸のことを排し、只精神の勝利としてのみ之を說かんとするものである。

キリスト死して既に形ない、天に在りとは空間の謂ではない、只其精神は使徒及び多くの人の心を動かし、今や義人の原動力となりて猶生きつゝある、こゝを以て基督一ケ人の生活は今に繼續して不死と云ふても亦何の不可かあらう。そは少しも確なる生命を握るに妨げないからである。夫の形骸の末に相爭ふが如きは、抑も甦生の內容を知らないで、遂に基督敎を誤るの徒である、形骸の上に就ては如何なる見解を執るも問ふ所ではない、只吾人の確に握らさるべからざるものあることを忘れなければ幸である。

復活の生命は神の生命也

神は永遠限なき生命である。其永遠なるは物質の永遠といふ如きではない。眞は眞正の生命である。道義的活動を有し又人格的活動を有する生命である。之なくしては吾人一日も生くることか出來ぬ、之れか吾人の中にあるだけ吾人は存ふることを得るのである。もし之なくんは吾人の生命は只影のみだ、蜉蝣の生命と擇ぶ所はない、五十年何爲ものぞ、紅顏忽ちにして白骨、世事齷齪する所宛然として猿猴の水月を掬するが如くであらう。然れども一且面を飜して永遠無窮の神を仰ぎ、無始無終の生命の中に生活し初めんか、ア、吾人の生命には醉生夢死に非るものありて存するを悟るであらう。吾は無窮に生長し、神の限りなきと共にわが生命の發達極りなきを感ずるであらう。されど貴き此の生命に至るには一度現世を通らなければならぬ、現世は卽ち準備の生活である、否な現世のうちに高尙

なる生活がある。神と共なる生活に入りて始めて現世の夢ならざりしを知るべきである。甦生とは卽ち此生活の變化を表すものだ、限りなき生活は甦に足るの生活であるからである。如何にせば此たかき生活に入るを得べきか。キリスト曰はずや「之れを失ふものは彼を得ん」と。パウロも「すべてのものを捨てゝキリストの甦を取らん」といふた。吾人も亦一切を擲ちて如何がして甦の生命を心中に受けたいものだ。復活の生命の吾人心中に生長するのは、宛も兒童智育の發達に似て居る。外よりするのではない。內部に潛める勢力によりて花蕾の徐ろに開發するが如きものがある。甦の生命とは卽ち其內容の發展に外ならない。之を意識し之を悟得するに非ずんば人生五十何の役にもならぬ。吾人世に處し、此の生命を握り之に生活し而して之を發展せしめ得て始めて眞正の人格を生ずる。此處に自らを立つるに非んば未た以て眞人を談するに足らぬ。キリストはこの生活の模範てあつた、故に「曰く汝吾に從へ」と。吾人速にキリストに從ひて此の生活に入るべきではないか。嗚呼吾人は眞の信仰に立たなければならぬ、「復に足る」ものをして吾人の中に生長發達せしめなければならぬ、キリストの十字架の意義を明にし更に復活の內容を握らなければならぬ、而して劒戟亂刺の間にありても吾れ不死の確信を得なければならぬ。吾人願くは諸君と共に力を盡して、聖なる神に此事を祈らう。

神殿とは何ぞや

天然の裡に神を拜せしこと

古の人は活ける神と交るに多くは山水の間に於てした。蓋し當時人々の住む所多くは天然の中であッて、穴居といふ程てないにした所が、或は西に或は東に天幕を携へて水草を追ふといふ所謂遊牧の狀態

てあッたから、人々の活ける神と親んだ所もかの天幕の中でなくして、寧ろ天幕の外てあッたことは當然てある。去れば或は高山雲深きところに神と交ッたものもある、或は清水苔滑なる處に神と親んだものもある。夫のヤコブは廣漠に徨彷し一夜大空の下に石に枕して眠り、茲に清き夢を見て神に近づき、其の目覺むるや其處を清め石を積み重ねて神の殿となしベテルの名を萬世に殘した。又アブラハムは高山に登り最も天に近づける心地をなし、遂に我が獨り子をも惜まずして神の心を喜ばせんとした。又夫のシナイ山の邊り羊を友としつゝ神に仕へたる一牧者は、其山を上りて中腹に至り未だ曾て有らざるの大なるインスピレーション(神興)を得て、感奮するの餘り靴を脱して思はず默頭いたといふ話もある。思ふに當時の人は此天地造化を以て慥かに神の殿てあると思うて居ッた、高き山、清き水、朗かなる野、澄み渡れる空の裡に神を認めたのてある。吾等は彼等と

萬有を通して現はるゝ神の莊嚴

時を隔つること數千年、今や黄塵萬丈の中に跼蹐して靜かに天然と直接するの機會に乏しけれども、併し吾人と雖も一歩足を郊外に轉すれば、亦此同じ幸福を受くることが出來るのてある。否殊に基督の福音が擴まるに從ひ山紫水明の中に神を認むるの事實は益々多くなッて來たと思ふ。夫のアルプスの天險を超えて佛蘭西日耳曼の間に基督教の擴まりて以來、如何に人々が造化の間に神を認めし事ぞ、彼の國の數多き詩歌は卽ち此消息を明にして居る。只惜むらくは我が日本人の天然造化に對するや、只花鳥風月を樂むといふ位に止り、其以外に神に親むといふ雄大なる情感を舒べたもの誠に少いのは甚だ殘念とする所てある。

扨て吾人が天然に接して先づ感するものは神の莊嚴なることてある。何によりて之を感ずるかと云へば天變地異によりてゝある。夫の濁流滔々として全地を呑むとき、又は山岳河川大に震ひ動くとき、若

くは又高岳火焔を吐て天を焦すとき、人は其前に平伏して神の威嚴を感ぜざるを得やうか。「ユダヤ人はアラビヤ印度の方より吹き送る辻風に遇ひ、エボバ暴風の中に物言ひ給ふ」といッた。天地萬有總て神の榮光を顯さゝる者はないのである。夫の太陽崇拜の古俗の如きも亦中々意味のあるものがある。一望涯りなき東海の邊に立ち万朶の光線を發して旭日の除ろに上るを見ては、誰か其陽氣の盛なるに感ぜずして居られやうか。又一日の業を終へ鍬を肩にし手をかざして西山に對し、日將に沒せんとして金雲紫山の陰に浮動するを見ては、誰か又其の壯大なるに感ぜざるを得やうか。宜なる哉古人旭日を歌て花鋏の盛裝して殿を出るが如く、又勇者戰陣の間に馳驅する如しといふた。於是彼等は幾度か太陽を崇拜せうとしたが、併し遂に此以上に更に偉大なるものゝ存在を認め、即ち太陽を見て神を感じたのは流石にユダヤ人である。彼等の見識は實に造化のうちに神を感することを得たのである。於是造化は即ち神の殿であッたのである。

國家のうちに神を感ぜしこと

然れども神の殿は造化のみには限らない。一體人は己を知ることを最も難しとする。古の人は己を知ることが出來なかッた故に只造化に驚くばかりであッたのである。少しく考が緻密になるに從ひ段々自分自らに驚くに至り自身が誠に不思議な者になッて來る。造化を見るのも己である、造化に驚くのも亦己れである。一體此自己とは如何なものであるか。舊約書の初めに斯う書いてある、神すべての物を造り給ひて後ち己れの姿に似せて人を作り給ひたと。然らば人間程神に似たものはない筈だ、とすれば神の肖像たるべき人とは一體如何なものか。夫の山川草木の間にすら神と交ることが出來るならば何て最も神に近き人間の裡に神を見ることの出來ぬ筈はあらう

ア。於是人の中に神ありといふことを感ずるに至ッたのである。併しこの人中神在りとの意識に至る間には更に一つの階段がある、即ち國家の中に神を見るといふことである。古の人は漸く國家に心付いても自分といふものには中々心付かなかつたのである。彼は最初國家の權威偉大にして其命令には何人も背くことを得ず、背けば大なる責罰を以て吾人に迫り來るのを見てその國家の雄偉なるを感じ、遂に之を神の殿と思つたのである。此の考にも中々眞理がある と思ふ。何となれば國家は即ち人々の集れるものである、而して其人々が神の姿を有するものたる以上は國家も亦神聖ならざるを得ざる筈であるからである。かくて古往今來の歴史を讀み邦國の治亂興廢を見たる預言者等が國家の偉大なるを感じたのは寧ろ當然の事理である。正義を守る國家は日に〳〵盛になり、天地の公道に背ける國家は腐れて遂に自滅する、即ち盛大なる國家の中に一貫の正義を

見た、國家は是に於て神の殿である、國家の法律に背くは即ち神に背くのであるといふ譯になり、大に國家を重んじたのである。

一個人即神殿の自覺

之より尚進んで一ケ人の五尺軀の中に尊大なるものあるを見るに至つた。此のことの明になッたのは基督を以て始めとする。基督は自ら殿より大なるもの此處に在りと宣ふた。是に於て始めて人類の中に如何に清き尊きものあるかに心附いた。是れ基督教の大に世に敬重せらるゝ所以である。個人個人の中に天地間の最も莊嚴なるものが宿ッてるといふ聲は、單に耳にきくのみならず深く心に思ふ時に吾人は最も嚴肅を感するのである、併しこゝに來るには順序がある。始めは即ち國を以て神の殿となし、國家の神殿を飾るに金銀寶石等あらゆる一國の粋を集め、以て此殿の神聖なることを人民が認めて

居つたのである。今日吾人は之等莊麗なる殿に對して尊嚴を感ずることと至て少きも、猶かの伊勢の大廟に至りては一層の尊嚴を感ぜしむるものがある。大廟に詣でゝ第一に吾を壓迫するものは造化の莊嚴である。古木森々として吾人をして頭を擧くるに堪へざらしむる造化の裡には、古人のこゝに神を認めた跡が歴然としてある。又其建築は古風な單純のもので只白木を用うるに過ぎない、併し其最も單純な所に無垢潔白を感ぜしむるのがある。蓋し日本人の粹は潔白に存する、伊勢の大廟に於て天眞爛熳たる日本人の本領は其儘に現はれたので、又歴史ありて以來の根蔕にして日本帝國の精神の集れる所と傳へらるゝも尤もである。之れやがて寺塔衰微の今日に在りて猶ほ大廟の尊嚴を感ぜしむる所以である。此所に當り若し伊勢の大廟よりも大なるもの茲にありといふものあらば吾人は之を狂人と見ざるを得ぬ。然るにユダヤには實に此人があッた。古へユダヤ人

殿より大なるもの茲に在り

に取りてエルサレムの殿は實に無上のものであッて、曾にユダヤ一國の殿のみに非ずして實に全世界の殿であッた。彼等はエルサレムを以て世界の中心だと思ッて居ッたのみならず、世界萬國は終に獨一の神を崇拜するに至るべきを疑はなかッた、而してエルサレムの上地にある神殿は即ち世界の神の在す所にして萬國の人の禮拜を受くべき處であると考へて居ッたのである。然るに忽焉として一人あり、その殿よりも大なるもの茲に在りと喝破した。その人を見るに身に着けたる衣、喰ふ所の食物、又其風姿容貌少しも常人と異らない、而かもこの莊麗宏大なる殿を眼前におきながら、夫よりも大なりといはゝ、そは如何なに貴い者であらうか。自己を殿より大なる者とせる自覺は實に偉大なる者とせざるを得ない、而して此自覺は基督の自覺である。此の基督の出現に依りて所謂殿の時代は過ぎ去つて仕まひ、殿の大なるを見て殿即ち自己なるを知り、始めて自己

の尊殿を自覺するに至るの時代となつたのである。

「心の清き者は幸なり其人は神を見ることを得べければ也」。吾は神殿なりと感ぜる基督の胸中には邪念なく邪心なく、心鏡の明淨なること天地の活ける神を映して餘り有るものがあつた、否神の姿そのものが基督の胸中に躍如たるものがあつたのである。彼は影を握つたのではない、實在を捉へたのである。夫れ海波に漂ふ月の影は清いに相違ないが月其ものではない、六尺去つて師の蔭を踏まざるは弟子の眞誼である、亡き父母の肖像に對してすら孝子の心中には無限の感を禁じ得ない。況して神の影の如き其尊いことは勿論であるが、併し影でなく實在ならば如何なに尊からうぞ。恩師の像は貴が、若し其先師の實子にして先師と感情を同うし、思想を同うし、人格の點に於ても先師の生ける姿となりて來るあらば、之に對する弟子の感は如何であらう。古より大人豪傑の兒孫が往々人心の歸嚮する所

となるは偶然でない。又若し一人の娘にして亡き母と風姿相貌に於て又品格性向に於て酷似する者あらば、そは何よりの形見でないか。然るに茲に神の影を宿せるのみならず、眞に神その者の表顯たるものが表れたのである、是れ卽ち基督だ、基督の品格は卽ち神の在す所である。故に基督は無上の尊榮を負うて居るのである。基督が神を見るや之を天上に於てしたのではない、之を心に撮して見たのである。卽ち己れ神たるの自覺をなし、神たるの思をなし、神たるの愛の働をなして、神とは取も直さず斯くの如き者であるといふことを示した、卽ち神は活きて働いて基督の心中に動いたのである。是に於て吾は殿より大なるもの也と叫ばざるを得ない。

人格的生命の神殿

吾は殿よりも大なりとは實に大なる思想である、此思想の發動する

や、凡そ基督を信するものをして凡て彼と同情同感ならしめ、基督自身の意識即ち吾の意識となりて茲にクリスチャン、ライフ(基督教の生命)なるものを生ずるに至る。此働きは即ち聖靈である。而して此働きは更に進んで基督教徒の團体に這入ッた、「二三人共に祈る所には吾も共にあらん」とは是れである、基督其儘の實在が團体の中に現出するのである。故に此團体も亦エルサレムの殿よりも大なる殿である。仮令んば金銀寶石をえりはめたる遠ち彼ちの神殿は壊れて無くなるとも此の生命の殿は消に失することはない。「汝此殿をこぼて、われ三日にして之を築かん」と基督は宣うた。エルサレムの殿はなくなッても之より大なる殿が彼の人格の上に確立したのである。此殿ころ神の喜び給ふところ、又神の精氣にて立つ所のものである。吾等いま神より新なる會堂を賜はり相共に集りて神を禮拜するは誠に喜ばしいことである、只忘るべからざるは銘々に基督の精神の宿れ

る個人々々の團體なることである。斯かる殿は決して外部の壓迫より出來たものでなく、一種の生命として生長發達し來ッたものである。既に基督を信ぜる者何か爲めにこゝに集まりしやといふに、神を崇め基督の心を有するもの同情同感相引いて自ら相集まッたので、云はゞ基督を中心として吾等は茲に彼を圍繞してるのである。而して此團體は又益々生長增加して行くのである。其生長するや全く外部より附着するのではない。如何なに堅からうが外部から固めたものは神の殿たるに十分でない、神の殿は精神より精神に稀りて發達すべきものである。今茲に新に教會に入るものは精神に於て吾人と同情同感の人である、新なる心今忽焉として勃興し内心已む能はざる所あるの人である、從來も正義を蹈んだらうが、更に發憤志を立て決然として基督の如き人格たらんことを希望するの人である、從來も人を愛したらうが、更に同情を多くの人に注ぐの感が起り居る

會同の利益

寺院の朽蝕

の一人である、即ち新なる生命を生じた人である。此生命は外より來るに非ず、内より出來て増してゆく、基督の生命が個人々々の中に殖えて行くのである。神の殿の生長發達は即ち是だ。斯くて目的を同うし思想を同うし感情を同うする者自ら相寄らざるを得ない次第で、總て一堂に會して共に禮拜し共に祈るときは其間に温情の溢るゝもの亦大なるものである。勿論吾一人孤立しても自ら神の殿たるを感ずるに妨げない筈だけれども、爲めに動もすれば情想の自然と冷にる傾がある。然れども同志相集るといふと其間大に温めらるゝものありて一層餘計に神の殿たるの感を深うするのである。

嗚呼今や多くの寺院堂塔は年々風雨のために朽蝕して行く、祖先が神佛の鎮座と做し最も神聖なる所とした多くの殿は、甚だ人の顧る所とならないで、日に〳〵衰滅に赴き半ばは狐狸の浪箱に委して居る。是れ抑も何の譯だらう。内部に大なる精神勃興して真の神殿之

活ける神殿の續發

に代らんがために破壞の勢を逞うするのか、抑も亦高潔なる人格の増殖するにつれて古き殿は必要を認められないのか。兎に角吾々は多くの古き聖場の破滅すると同時に他の新しき聖場の殖えゆくを望むものである。然るに不幸にして今之に應ずるものはない。會社も腐敗して居る、官衙も無論のことである、學校までが神聖なる所と許すに足らない、誠に其欠乏を嘆せざるを得ぬ。若し此際生ける殿が一つでも殖にるならそれこそ大に歡迎すべきものである、是れ吾人が會堂の建設を喜んで止まない所以である。且又吾々の教會の新設を喜ぶ所以は、啻に之を以て寺に代らしめんが爲めなるのみならずして、新なる精神の活ける神殿が續々發生するの兆候と見るを得るからである。而して願れば此殿を作りつゝあるは實に吾人銘々である、否な活ける天地の神が吾人をして殿を作らしめ給ふのだ、吾人は否む能はざる天の御聲を聞きて此殿を作つたのである、又吾人

は神と交らざるを得ない、止む能ざる情念に驅られて此處に集つた。吾輩が敢て講壇に立つのは人の前に衒ふ爲めでなくして、吾をして茲に立たざるを得ざらしむる尊き精氣に驅られてゞある。諸君の茲に集るも亦單に說敎を聞かんが爲めに非ずして、諸君をして來り集らざるを得ざらしめたものがあるに依ると信ずる。此天地を支配する生けるわが神は此處に在して一々わが情念の願ふ所を滿足せしめ給ふ。且つ語り且つ聞くは一人の心の向ふ所に總ての人の心も均しく向はんが爲めてある、向ふ所は即ち清き神の御坐である、神に向つて心をあげ神に至るの手段として且つ語り且つ聞くのである。若し然らずんば即ち神の殿を汚すものである。願くは一歩たりとも神に向ひ、神と親み、神の尊き力に觸れ、斯くて銘々心に己れ即ち神の殿そのものたるを深く自覺したいものである。

基督教界の三聖

聖オーゴスチンの信念

基督敎はじまりて以來世界の宗敎思想を支配する大立物が前後三人ある、聖オーゴスチンはポールルーテルと並び稱せられて即ち此三人の一人てある。彼は永らく未信者で、年三十三のとき始めて信者となつた、之に至る迄には極めて苦心慘憺した人てある。

彼の父母

オーゴスチンの氏苦悶の源

オーゴスチンを能く見るには先づ其父母を見ねばならぬ。オーゴスチンの心中には絕にず二つの力が相戰つて居つたことを見るときは、何人も是れ兩親の性質が異るの結果と心附くてあらう。抑も人々の心には父より賜はる性質と母より授かる性情とを有するものである。不幸にして父母の性質相異なるときは二者調和を欠き、爲に一種の

父母の性質

苦悶を起すに至る、尤も修業を積んで之を調和するとは出來るに相違ないが、豫て修業をつまない人は動もすれば二者の最も惡い處のみを傳へて、汚れを子孫にまで殘し易い者である。わがオーゴスチンの如きは實に這種の苦悶に惱んだ一人であつた。

オーゴスチンは西歷紀元三百五十四年十一月十三日亞弗利加の北部ヌミヂヤのタガステーに生れた。父は辯護士を職とし一と通の學問もあつたが、性來短氣の質で往々胸中怒火を燃し、最愛の妻をすら屢虐待するとがあつた。又劣情の擒となり、品行修らず、兎角の醜聲もあつたとのことである。之に反して母のモニカは元基督信徒の家庭に育ち、善き教育を受けた人で、パトリシアスの家に嫁しても温和で周到で忍耐で判斷に富む賢婦貞女であつた。されば屢夫の虐待を受ても之を忍び、後靜に忠告して夫をして反省する所あらしめ、又夫にあるまじき行ありても務めて之を寬容し漫りに夫を惱すことはなく、只管神に祈りて清き義しき男となれかしと心を盡して居つたといふ。果して遂に其熱誠は夫を動かし其死する一年斗り前に夫を基督に附かしめた。

オ氏の幼時

オーゴスチンは實に此二人の性質を受けて生れたのである。彼は當時羅馬の支配を受けしも羅馬人ではなくてカルセーヂ人である、故に熱情頗る盛なる者があつたが、又羅馬人の如く綜括の能力にも富んで居つた。段々年長ずるに從つてオーゴスチンの才は愈現れて來る。父は只學問によりて身を立てしめんとし、母は人格をみがく點に重きを置いた、母は目前の榮達を求ず、餘程遠慮のあつた人と見える。

オーゴスチンは兎角乾燥無味の學藝を嫌ひ、遊戯は最も好む所であつた。古人の書を嗜むに至つてはヴアージルの著書の如きは最も其愛誦する所となつた。

遊學と墮落

十六歳のとき彼は故郷を去りてカルセージに遊學した。當時カルセージは文明の都で學者も多く、勉學には極て便宜の地であつたけれども、また一種の惡風ありて一部の社會は風俗極めて紊れて居つた。オーゴスチンは何時しか此惡風にしみ、十八歳の時には遂に肉情の奴隷となりて妾　蓄ふるに至つた。之れ父より見れば普通のことゝ許すならんも、謹嚴なる母に取りては此上もなき大打擊である。然れども母は漫りに子を折檻して前途を躓かしむる樣なことはなく、忍んで神に助けを求めつゝあつたのである。

斯くてオーゴスチンには二つの反對なる性情がある、一は母に抱かれて會堂に詣でつゝ養はれしもので、又一つは父と同じき不品行に陷り易い氣質である。彼は學問進みシセロのホルテンシアス抔を繙くに及び、理想は段々高くなつたが之と共に又其行爲の不完全なることを感ずること切になつて來た。けれども性來の慾火は不品行を思ひ斷つことを許さぬのである。母に敎へられたものとシセロに學んだものとは猶高き處に思を廻らさんとすれど酒色の慾は之を妨げて止まない。この二ッの力、善心と惡心と、私心と本心との苦悶苦鬪は十有餘年の間彼に於て熄まなかつたのである。遂に彼が善惡の苦鬪は人類に免るべからざる必然の常態にして到底調和すべからざるものと思つたのも無理はない。獨り自分のみならず天地萬物皆然りとは少くとも彼の哲學觀であつた。

マニキー教

彼の觀る所は斯くの如く基督敎の敎ふる所と異つた。何んとなれば基督敎は決して一歩たりとも惡をして善を凌がしめぬからである。

故に當時の基督教は彼に取つては善惡問題の解釋とはならなかつた。然るに當時マニキー教といふものが跋扈して居つた、ペルシャより起り遂に學者の宗教となりて歐羅巴にまで侵入して來て居る。一種の二元論を唱ふる者で善惡混淆の教説を立つるものだ。オーゴスチンは即ち此教學の徒となつたのである。蓋し善惡混淆の教説の如きは云はゞ彼の實驗を其儘云ひ現はしたものである、彼が容易く之に投じたのは深く怪むに足らない。彼が此教學に入つたのは二十歲の時で爾後九年間之を奉じ頗る敬虔なる慈母モニカの心を苦めた、此間如何にモニカが愛兒の爲に心を苦めたかは次の逸話によりても明である。或夜母がオーゴスチンを伴ひ輝ける一青年其前にあるを夢みた、目醒て母は之を我が子が基督に歸るの前兆だと思ひ其次第をオーゴスチンに告げた。オーゴスチンは却つて嘲り笑ひ其青年はマニキズムの使で母がマニキー學に來るのだといふた、其時母は儼然

モニカの心痛

母をすて羅馬に走る

としていひけるやう「否々其時われ自ら汝の處に赴きしにあらで汝われの傍に侍りしに非ずや、汝は到底わが宗門に歸り來るべきである」と。實に此一言こそ大にオーゴスチンの心を動かせしものであつたらう。

羅馬にゆく

斯くの如くしてオーゴスチンは諸方を遊歷して學問を勵んで居つた、此頃オーゴスチンの父は既に世を去り寡婦たるモニカは子を慕ふて甚しく、如何にもして彼を教化せんものと苦心した。彼や思想深邃、學者としては頗る達識の士だけれども、惜いかな品行修らず頗る母を苦めた。こゝに又更に母を痛めた一事がある。オーゴスチンは晴れの都て一かどの功名を博せんがため遠く羅馬に行かんとしたが、母は最愛の獨兒に分るゝを好まず、大に慨いた。母は決して羅馬

に行くなと留める、若し強て行くならば、頼りなき我をも伴へと乞うて止まぬ。けれどもオーゴスチンの決心は最早動かすべくもない、彼は母を欺いても出奔しやうとして居る、一夜母は會堂に至り暗涙潸然として子の決心を翻すべく切に神に求めて居る、之にも拘らず、オーゴスチンは其の夜密かに母をすてゝ羅馬發程の途に上つたのである。後に殘されて之を知れる母は如何に斷腸の思をしたであろうが。併し此羅馬行は彼の一生に於て著しき轉化の基をなした、彼もし羅馬に來ることなかりせば、或は基督信者とならずして仕舞つたかも知れぬ。されば此羅馬行は或は神の導きであつたかも知れぬ、と思ふ。後ちオーゴスチンは自らいふて居る、「夫の時神はわが母の祈を聞かざるにあらず、其祈の本意を聞き給ひしなり」と。之より先き彼は少しくマニキー教學に疑を抱き始めて居つた、其說く所に詐り多く之を奉ずる者に僞君子多きをば殊に不快に思ふて居

ミランに移る。

つた。羅馬に到りても此念は彼より離れない、暫くして彼は修辭法の教師としてミランに聘せらるゝことゝなつた。こゝにミランにアンブロースといふ名高い牧師がある、高德博識の君子で王侯貴人と雖も此人格の前には膝を屈したといふ。此頃オーゴスチンは心中流石に基督教を願ざるを得ず、私かにアンブロースを敬慕して居つた。初めは只其雄壯なる辯舌を學ぶ積りであつた、彼も一度まのあたり其人の說教を聞きては益々其人格を愛慕するの念に堪へなかつた。彼の心の大に動いたのも凡そ此時よりである。彼は此時より折々聖書を繙いた、けれども聖書は餘りに子供らしくて彼の其折の見識に投合しなかつた。故に去つて新プラトー學に赴いた。抑も新プラトー學は大に基督教と似或は之を基督教の哲學的說明とも見るべきものである、哲理に於ては新プラトー學、宗教に於てはキリスト教とも云べき關係があるのである。されば

アンブロース

新プラトー學

オーゴスチンの哲學的頭腦は先

以て新プラトー學に於て滿足された、非常の興味を以て之に耽つたのも無理がない。遂に彼は之を以てマニキー教學を打破し、自らは熱心なる求道者たらんとするに至つたのである。

モニカの羅馬行の動機

モニカ兒を追うて羅馬にいたる

母モニカはしばらく故郷に殘つて居つたが、日として愛兒の上を思はぬとはない、遂に意を決して單身海をわたりミランの都に赴くとにした。是蓋し一には兒を思ふの情が切なのと、又一には愛兒の改宗を見届けねばならぬといふ一種の使命を感じて居つたからである。されば其決心頗る堅いものがあつた。既に船出して數旬、一夜暴風大に起つた、激浪怒濤山岳の崩るゝ如く、船は只其弄ぶ儘に上下するのみで、今にも覆されんとする有樣である、乘組の水夫客人皆生色なく全く絶望して身の終はりを待つのみだ。多年航海に練達した

暴風にかけるモニカの堅信

る船長も其妙技を施すの術もない。總て惱み悶えて死期の近づくを待つのみなるに、獨り年老いたる寡婦モニカのみは聊も失望せざるのみか、却て毅然として船長水夫を勵まして居る、「船は決して覆へるとがない、安心して力を出し給へ」と。遂に船長等も此語に勵まされて奮發し、首尾よく目的地に達するとを得たさうだ。思ふに彼女の胸中偉大なる確信あり、此信仰の力が幸に神の容れ給ふ所となつたものと思はれる。蓋し彼女は到底愛兒が基督の徒となるを見る迄は成佛が出來ぬのである、まのあたり彼に面して之を改宗することがわが老後唯一の天職である、神は此天職を果さゝるにわれを此世より召し給ふことはないと確信して居つたが故に、如何に激浪逆捲くとも彼女の安心を紊すには足らなかつた。アゝ此偉大なる信念如何んぞ永くオーゴスチンの胸裡に徹底せずして居られやうか。

靈性の苦悶

悔改の二困難
一、理性の不滿足

モニカは無事にミランに着いた。オーゴスチンは今も變らぬ慈母の溫容に接して益々其心緒を動かしたに相違ない。けれども未だ十分に悔改むることが出來ず斷然神に從ふの決心をなすに躊躇して居つた。思ふにオーゴスチンが全く悔改するには二つの困難がある。一は理性の不滿足である。彼は當時にては先づ有數の學者といつてよい。基督敎の幼稚なる敎說は彼の理性を滿足せしむるに足らなかつた。例へば罪惡の出所につき敎會では人の自由意思に在りと主張する。然らば全智全能なる神は何故に人類に授くるに罪を犯すの傾きを以てせしやと詰問すれば、そは惡魔ありて人を誘ふに依るといふ、惡魔とは何かといふと天使の墮落した者で、其墮落は卽ち自由意思の結果だと附會する。是れ自ら罪に惱みつゝあるオーゴスチンに取

二、道德上の弱點
妾を去る

りては明に知らんとする大問題であつて、又以上の說明にては滿足し得ざる所である。併し此方の困難は比較的面倒でない、此人の病根は猶其以上に在る、是卽ち彼の道德上の弱點である。彼は性來極めて多情の人でカルセーヂ遊學以來妾を蓄へ、今は一人の男兒をさへ擧げて居る。嘗て二三の親友より將來產を共にし獨身を守り生涯を眞理の探究に委ねんと勸められたけれども、それすら同意するを得なかつた。今や基督敎に入らんとするには當時の慣習に從ひ現在の妾を去らなければならぬ。是彼の尤も煩悶に堪へぬ所である。思迫つて之を母に相談した、母も之に贊成して遂に十餘年苦樂を共にした婦人を去ることに決した。今日より見れば多少非難すべき所なきにあらざるが、當時に在りては之も相當の道德であつたのである。斯くて母は愛兒のために別に立派なる正妻を娶らんと奔走し、漸く一人の妙齡の婦人を獲た。婦人年少きを以て二年の後結婚するとを

弱點の發露

約した。是に於てオーゴスチンは意を決して十三年來の哀樂の友をば泣く〳〵アフリカに歸らしめた。此婦人分れに臨んでいふた、再び男子に見ず、清らかに餘命を送らんと。斯かる貞節の婦人を去ることは如何に斷腸の思をなしたのであらふ。

さて斯く決心をしたのは中々にらい、けれども彼の性來の弱點は動もすれば彼の道念を暗ましさんとする。二年の後には花の如き妙齡の美婦を娶るといふ麗はしき希望はありながら、其間すら貞操を守り得なかつた。母も一緒に寢食を共にして居るではないか、斯くても情慾に勝ち得ずとは何たる弱いことであらうぞ。すべて人情の弱きこと實に斯の如きものがある、吾等は之を思つて恐れ戰かざるを得ない。けれども諸君、オーゴスチンは遂に救はれた。もし諸君の中既に犯し來れる諸々の罪のために神の前に出づるを難んずる人あらば須らくオーゴスチンを見給へ、如何に弱き人も救はるゝ道は存する

當時の教會

パウロを慕ふ

のである。

翻つて當時の教會の有樣を見るに其盛なること素晴しいものがある、コンスタンチン帝に依りて國教とせられてより未だ久しくない。以前迫害を蒙りたる時代の殉教者の目ざましい美談も當時には一の懷舊談のみではなかつた。況してアンブロースの如き有力なる牧者あるに於ては導く者と導かるゝ者と信仰の熱火熾々として其勢や當るべからざるものがあつたであらう。見れば貴賤賢愚打ち交り清らかなる白衣を纏うて聖壇の前に跪き、熱心に祈り且讃美して居る、「基督の百合」と稱せらるゝ麗しき處女はまた祭壇に對つて將來獨身で神に仕へ奉らんと誓うて居る。オーゴスチンは心大に動いたけれども未だ到底此熱火の中に自ら投ずるを敢てし得ぬ。彼は密かにポーロの書を繙いた、讀んで見るとポーロの人格が慕はしくてならぬ。ポーロの人格は即ち我れ自らの人格かと思はるゝ。ポーロが所謂内な

る人と外なる人と、即靈と肉との苦鬪に悶ゑ苦しみ、遂に基督によりて始めて神と結びし事は彼が限りなき同情を注がざるを得なかつた所である。ポーロの書は固よりプラトーの理想を示さぬ、マニキズムの善惡混淆論も說かぬ、けれども善が惡と奮鬪して遂に勝つといふ雄大なる精神は此書を見るものゝ肺腑を貫かずんば止まぬ所である。オーゴスチンは實に熱涙を振つて之を讀んだのである。

豁然として光明の域に入る

或る時無二の親友アリピオスと共に且つ讀み且つ談じて居つた。そこに之も友人なる一軍人訪ね來り、机上にポローの書あるを見て談は宗敎のことに及び、此軍人は自ら見聞せる二三の逸話を述べた。一はセントアントニーの譚で、基督が「我に從はんとする者は凡ての持物を捨てゝ來れ」との條を讀み、あらゆる財產を賣り拂ひ單身孤獨ア

フリカの廣野に入つたといふことである、軍人更に語をつぎていふやう、わが隊中に一青年の兵士あり、此者亦アントニーの遁竄を耳にし大に悟る所あり、軍職もやめ將に婚せんとせし許嫁の婦人をも去り、決然アントニーの跡を追うて荒野に入つた、婦人もまた一大決心をなし再び夫を迎へざるを誓ひて修道の人となつたと。

此二つの譚は痛くオーゴスチンの本心を衝かした。無學なる兵卒すら一旦感激すれば斯くの如くなるに吾の之に及ばざるは何事ぞ、名譽何物ぞ、財產何物ぞ、婦人何物ぞ、われ今更無學なる兵士の跡を追ふは恥辱であるけれども、併し猶現狀に戀々たるは其にも增した大恥辱である。是に至つて彼の情念は激昂して最早堪らなくなつた。客の辭し去るや强て抑へたる情感は一時に迸發して最早親友も談ずるに足らず、遂に走りて無花果樹の下にいたり號泣して神に訴へた。「わが神わが神何時まで汝は吾を憤り給ふ、過去の罪を憶むる

勿れ、何時迄か〳〵。明日か今日か。何んぞ此瞬間に吾が恥辱を拭ひ給はざる」と。號叫之を久うして遂に彼は意を決して天地の神を只一人の戀人とすべく誓言した、噫、彼は實に神の爲には斷腸の悲痛をも辭せず、將に婚せんとせし妙齡の美人をも捨てんと決心したのである。抑もオーゴスチンの改宗は只一種の疑問が晴れて光明を見たといふが如きに止るのではない、あらゆる物を斷ちきりて只一人の神を抱くといふ苦しい實驗の結果である。前途の希望の半以上を占めたる婦人をも捨つるに至つた苦心と決心とは眞に察するに餘りある。今や彼れはこの最後の苦を斬り拔けて漸く清明の天地に入つた。折りしも天外聲あり、「取りて之れを讀め」と響いた。オーゴスチン乃ち再びアリピオスの許に歸り默して聖書を繙きしに羅馬書第十三章終末の句が現れた、曰く

今は寢より寤むべきの時なり蓋信仰の初より更に我儕の救は近し、夜

靈性の大勝利

オ氏の悔改は母の至誠による

すでに央て日近づけり、故に我儕暗昧の行を去りて光明の甲を衣るべし、行ふ端正して蜜あゆむ如くすべし、饗宴醉酒また好淫好色また爭鬪嫉妬に歩むこと勿れ、惟なんぢ等主イエス、キリストを衣よ。（十一節十四節）

と。正に是れ彼に取りての無上の警句、口づから神命を聽くの思をなし欣喜措く能はずして彼の意思は全く定り、こゝに彼は十有年來の煩惱をば一刀兩斷の下に切り捨てゝ靈的一大勝利を得たのである。アリピオス亦「信仰よわきものを取り入れよ」と切にオーゴスチンの爲めに祈つた。やがて連れ立ちてモニカの許に至りて具さに決心の次第を告げた。如何に母が狂喜したか、又何の辭を以て神に感謝したかは委曲を述ぶるまでもあるない。

オーゴスチンの悔改はモニカが二十年來の宿望であつた、彼女は之を以て自分の天職と感じた。今に至つて其喜びや察するに餘りあれ

ども其れまでの苦心慘憺の痛みも亦非常なものであつたらうと思ふ。

オーゴスチンが遂に神に歸せしは彼自らの發奮にもよるだらうが、主として此母の熱誠に基くといはねばならぬ。後年オーゴスチン自ら記していふた、曰く「わが母は二度生みの苦をなせり。一度はわれを此世に生まんが爲め、一度はわれを天上に生まんが爲めに」と。

斯くの如くして彼は年三十三にして始めて道に入り遂に耶蘇教中興の祖となつた。吾人は委しく彼の晩年を述ぶるの暇を持たぬ。吾人の目的は只此人の信念を窺ふことにある、信念を窺ふに必要なるが故に茲に悔改に至るまでの事蹟を述べたのである。蓋し其人の宗教思想は往々其人の閲歴によりて推知することが難くないからだ。オーゴスチンが道德上の大難問を解釋し得たのも全く神の力と惠とによりて自ら罪惡に勝ち得たるその實驗に依つたことは疑ない。

凡そ吾人の智能上の疑問は往々其基礎(否な病根)を道德上の品格に置くものである、道德上の病根を去れば哲學上の難問は立ろに氷解することと決して珍らしくない。健全なる哲學は健全なる哲人を待つて出づるものである、懷疑の雲に蔽れたる諸々の學者よ、願はくはオーゴスチンの事蹟に鑑み　其病根を去るべきではないか。

オ氏の宗教的實驗の大略

抑も宗教の力は人格の內容となりて始めて至大の活働をなすものである。單に哲學者神學者の問題となりては誠に乾燥にして人世に力なきに至るものだ。例へばかの三位一體說の如きも當初は如何ばかり人を慰め人を高尙にしたか分らぬけれども、一旦之が教條となり神學哲學上の問題となるに至りては最早既に生命を失ひ却て弊害を殘した。當時の天下は恰かも此弊害の現れたる時勢で基督教界に取つては誠に悲むべき時であつた。然るに此時再び基督教の新なる生

命を發揮し平安淨樂の大源泉を開いて多くの人々の渴を癒したのは取りも直さずわが聖オーゴスチンである。オーゴスチンは固より當時の大學者で三位一体論もかき種々の哲學的神學的議論を殘したが、其最も多く世を幸せし者は其等堂々たる論議に在らずして、寧ろ彼の宗教的實驗である。之に基ける議論に亦見るべきものが多い。議論には多少非難すべき所もあれど、其宗教ろのもの即ち彼の信念に至つては永く万世に傳ふべきものがある。

さて當時最も健全なる哲學思想を有して居つたのはプラトー學派である。此派の説は獨り希臘にのみ盛なのではなく、羅馬に於ても之によりて大に眼識を開ひたものがある。シセロの如きは即ち之でオーゴスチンも亦幼時シセロの著書を讀んで大に感憤した。其後又彼は新プラトー學を玩味した。從つて彼が中々立派な哲學的思想を有して居つたのも怪むに足らぬ。けれども彼には猶ほ肉情もあり又功

名利達の慾念もある。之等の情や甚だ熾にして到底永く克つことが出來なかつたが、遂に彼は劣情を征服し、人世慾情の極盛時代とも云ふべき三十三才にして理想世界に入つた。そも如何にして茲處に入ることを得たかといふ點が此人の宗教的實驗の大事な所である。理想と慾情とに板挿みとなつて苦む者、世に頗る多い、併し之を脱して理想の域に入る人は極めて少ない、先づ二者の衝突を痛切に感ぜず、多くは情にかられて理想のない人が多い、又其衝突は感ずるけれども之を脱し得ぬ人も多少ある。オーゴスチンは實に此二段の實驗を重ね、遂に救はれて第三の理想界の人となつたのである。此階段を經たるが故に彼の實驗は多く世人の同情を惹かざるを得ない。

彼の見出したる救の神

彼が衝突の苦悶を脱して理想の域に入りしは何に依るかといふに、

之は神を見出せしとに基く。然らば彼を救ひ出せし神とは如何なる神か、プラトー學の神か。否、プラトー學は固より有神哲學の一で、プラトーも既に神の存在と其威嚴とを見たけれども、彼は猶天道は遙遠にして測り知る可らずとして居た。新プラトー學も亦神は容易に近くべからざるものといふ思想を脱し得ない。斯くの如き神は到底オーゴスチンを救ひ得る筈がない。實に彼を救ひ彼を光明に導き し神はかのユダヤ人の紹介した神である。即ち基督によりて現はれたる方面の神である。オーゴスチンは基督によりて本當の神に接し茲に自己立脚の礎を見出したのである。

然らば其神とは如何なる神か。彼曰く人的神也と。人的とは有形の意義ではない。形の有無の論は哲學的頭腦を有する彼の許す所でない、所謂人的とは人情に富む所を云ふのである。元來人は純乎たる理のみの動物ではない、情もある、否な情が大部分を占めて人間の

力となつて居るといふて可い、此の情に接する神の方面を人的といふのである。此神は基督の人格に最もよく現れた。舊約時代には神を以て恐るべきもののみ觀じたやうだけれども、又一方には最も親しき人情の神をも見ないではない。かのホゼヤが以てユダヤの夫たり父たりとしたる神、又は詩人が鹿の溪水を喘ぎ求むるが如く至誠を以て慕ひ求めたる神、實にかゝる痛切なる情感を以て慕はるゝ神はまたその情を以て接するの神でなければならぬ。併し神の人情は基督に於て最も明に示されたのである。去ればこそ彼は基督を以て神の化身也即ち神也と叫んだのである、之には中々深い意味のあることを知らねばならぬ。夫れ基督の人格の清き、愛情の細やかなる、人の犧牲となることも辭せず、小人罪人の友となりて樂むといふ赤心は即ち神の心にして、其人格が即ち神を顯すといふとは深い眞理である。且彼の母は夫を愛するが如く子を愛し、清き愛情を以

向上的情感の昂騰

て始終オーゴスチンに接して居た、天地の衷情は母を通じても彼に現れて居たのである。去れば此深い眞理が分つて來るに從て彼の神に對する態度も愛といふことにならざるを得ぬ。プラトーなどの哲學を讀んでは神の絶對なるとは知り得やうけれども、之に依ては愛といふことは起らぬ。オーゴスチンを救ふ所のものは愛情の神でなければならぬ。今や此方面は彼に分明となつた。是於彼は神を愛せずしては居られなくなつたのである。

理想なるものは高尚なれども本來力がない、慾情なるものは下賤だけれども本來力がある。前者は單に抽象的で人を救ふの活力がない。是れオーゴスチンの煩悶を永からしめた所以である。彼は到底清き愛情の力を必要とした、是遂に母モニカの愛によりて救はれた所以である。彼れが永くモニカの懷に抱かれて育てられし愛情の恩義は忘るゝを得ぬ所である、今や彼は此母の愛情は神の心である、母の

比なき愛情を神に結ぶ

最も清い部分は神の中にあることを心付いた。更に基督の人格に接するに及び彼は始めて神の全き御心にふれ、先きに母の至誠に捧げたりし彼の愛情は直ちに天の神に向つて傾注するとになつた。彼は神の中に最も愛すべきものを見出し、其向上的情感の昂騰するに從つて段々理想の力をも見出した。既に理想の中に力あり、愛あり、之より偉大なるものはない。總て肉につけるものを衝き破つて神に從ふとが出來る、いな全心を捧げて神に向はずしては居られなくなつたのである。

併し一方より見ればオーゴスチンに對して又一滴の涙なきを得ぬ。斯くも人情細やかなる人が年齒壯にして家庭の和樂を斷ち、妻も子も棄つるとは何たる慘憺たる光景だらう。彼にして若しストイク的の人物で妻子を見ること木偶骸骨の如きものあらばいざ知らず、多情彼の如くにして洋々たる快樂を後ろにせざるべからざるに至つた

のは實に此人の爲めに同情に堪へぬ。

然れども彼は此温き情感を全く殺して冷かなること死灰の如くなつたのではない。更に温い神の恩情の中に歸つたのである。故に彼は神の中に母、妻、及び子の愛情よりも更に大いなるものを見出すことを得た。此點に於ては又喜ぶべき所もある。彼の情感は果して乾燥ではなかつた。是れ永への花の彼の胸中に爛熟たりし所以である。

吾等男女を問はず、少くとも一度は眞に愛らしいと思ふ人格に觸るゝことがある。之を獲し者は人世の至幸である。之を獲なかつたものは精神上の大痛恨を感ずる。而して人類に取りて最も慕はしき最も愛すべきものは神であるから、吾人若し眞に此慕うべき神と親むを得ば何の慶福か之に及ぶものがあらう。オーゴスチンは即ち之を獲たる一人である。宜なる哉彼は誠に幸に其晩年を送つた。彼は妙齡

の美人をすつるといふ斷腸の悲劇を實驗したけれども、餘命を安穩に送つたのを見れば如何に彼が神の中に愛すべきものを見しかゝ察せらるゝのである。

性惡論

オーゴスチンは自ら靈性と肉情との苦鬪に惱み、肉情の根蹄極めて深きものあるを實驗した。彼の理想の高まるだけ益々人性の腐敗牢乎として拔くべからざるものあるを見、多年の辛慘を嘗め盡して漸く光明の域に入つたのであるから、彼の實驗より來る所の論議の如き、皆社會の腐敗と人間の性惡とを起點として居る。人間の性は本來惡なりとの見解が教論として現たのは實に彼を以て始とする。性惡論はパウロにも其萌芽あつたが、爾來三百數十年の間絶て唱導せられなかつた所である。此時ペラギオスの靈性善說を唱へたが、オ

惠の潔め

ーゴスチンは甚く之を排斥した。尤もこの性惡說には僻がある。併し之は彼の實驗上己むを得ぬ所だ。彼は慾情に支配されて久しく之を脫するを得なかつた人だ、のみならず當時の羅馬國は到る處腐敗に充ち〳〵て居り、彼は此間に生長せしが故に人性は本來惡なるものとせざるを得なかつたのである。

惠による神の救

オーゴスチンは只單に人性の惡を叫んだのみでない、彼は自己の實驗に基き本來の惡と雖も神の惠によりて潔くなるを得ることを唱導した。神は其酬を求めずして人々の罪惡を拭ひ給ふ。此限りなき惠みによりて吾々は救はるゝと彼れは云うた。是れ彼が晩年の淸き生涯は全く神の惠に依るといふ實驗に基く所の確信である。彼自ら曰く神の人を選びて之に惠を賜ふや實に拒む能はざる程の力を以てす。

拒む能はざる惠の力

教會の淸節

宛も太陽の朝露を消すが如く吾等の罪は消え去るなり。一旦惠に觸るゝものに淸くならず善とならざるの自由あるなしと。思ふに彼は幼時母の命に背いたこともあり、又母を欺き母を惱ました事幾度なるを知らぬ。けれども之が爲めに母の恩愛は聊も冷かにならず、更に幾層の情熱を增し始終子の爲めに圖り且つ祈つて居る。遂に子を淸うせずんば已まざるの決心をなして、遙々羅馬に迄行つた、其恩愛の力は到底彼の拒む能はざる者であつた。彼が墮落に墮落を重ね、千々に思ひを惱めた後、一度神の惠に接するや彼再び其慈愛に抗することが出來なかつた、年三十三にして遂に基督信徒となつたのである、爾來年と共に愈々淸高の品格を磨き、神の恩愛は以て我を救ふて餘りあるといふ確信を深うした。

思ふに斯の如きは是れ獨りオーゴスチン一人の實驗ではなかつた。當時腐敗を極めたる羅馬國中に於て獨り淸節を操守するは只基督信

論議の根底たる深き實驗の妙味

徒の團体のみであつて、當時の教會は即ち泥中の白蓮であつたから、神の惠を頼む者は凡て斯く清くなるとは誰人も教會を見たるものゝ疑はぬ所であつた。彼が恩愛の力の至大にして拒むべからざるを主張したのも、畢竟之等の事實に根據するのである。

オーゴスチンは實に極端と極端とを見た。彼は社會の腐敗を目擊しては人類を惡魔と觀じたであらう、けれども教會の有樣を目擊しては之を神とせざるを得なかつた。又彼の實驗も兩極に亘つて居る。前半の生涯は惡魔も管ならざれ共、其光輝ある後半の生涯は高うして殆んど天に達せんばかりである。天上と地下と又靈と肉との極端なる二樣の生涯は彼の實驗に備はれるを以て、彼の人性を論ずるや本來性惡論と神惠必然の救とを立て、殆ど人間の自由を無視するに至るのである。議論としては兎も角、其深き實驗を味ふ時はオーゴスチンの胸底愷かに靈泉滾々として永久に盡きざるものあるを見ざる

他の教理論

プラトーパウロ及彼

を得ぬ。是れ今日の吾人をして猶ほ彼の胸底に走りて不斷の泉に生命の渴を癒さしむる所以である。

其他教理に關する議論に至りては二三吾人の腑に落ちぬものもある。或は教會の信條を辯護せんがために理性を無視し自信を抛げしには非ずやと思はしむる所もある、時の勢已むを得なかつたのであらう。併し彼の理性は決して左程暗かつたのではない。故に心を潛て著書などを見るときは道理脈通して至誠其間に隱見するを感ずるのである。

彼はプラトーの見識を現すにパウロの熱誠を以てした。プラトーとパウロとはオーゴスチンに於て調和せられたと云つて可い。パウロがオーゴスチンに生れし如く。プラトーも亦彼によりて甦つたのである。

現代の青年に警告す

わが日本に於て近年宗教の研究といふこと頗る盛である。併し所謂研究といふは只形骸を解剖するに過ぎぬやうだ。吾人の希望する所は之れでない。内部的生命の發揮によりて血ある肉ある活宗教の起らんことを欲するのである。こゝに到るには只實驗に依るの外はない。諸君の中もし多少オーゴスチンと實驗を同うして今や内心の苦悶を感ずる者あらば充分其理想を明にし給へ。難を避けず苦んで撓まず飽くまで奮進せねばならぬ。其暗黑を通過せずんば光明を見ることは到底出來ない。例令迷霧の中に彷徨ふとも恩愛の神の御手は常に諸君の上にある、救の道は凡ての人に具はり居ることを忘れてはならぬ。基督の血は空しく其人の上に流れない。奮躍一番大に發明する所ありて一層高き處に出で來り給へ。茲處に到らずんば諸君

は禍である。所謂宗教家といひ世の光となりて多くの人を濕ほす所のものは此境涯の人をいふのだ。

此事はひとり宗教研究家に向つてのみの言でない。既に信者となりたる者も亦勵まなければならぬ。吾等は斷乎として基督の救を證明すべき筈のものである。天地の本體は絶對の善にして、此善が最後の勝利を得ることを自ら實驗して、自己の救を完うしたる以上は、又之を世に普ねく證明せねばならぬ。確信を以て之を證明するに非ずんば基督教は立つことを得ぬ。基督教の立つと立たざるとは此確信の立つと立たざるとに在るのである。佛教には不幸にして此確信がない、彼の徒の信念には佛と凡夫と、眞如と無明と相表裏して、云はゞ二元論の傾向がある。佛教が哲理を以て之を說かんとすればこそ六かしいのだ、倫理上宗教上より見れば何の困難もない、勿論罪惡論の如きは佛教よりも基督教の方之を說明するに苦しむ。けれども吾人

は之を考察に依らず、行爲によりて證明するとは難しとしない、吾人は慥かに靈性の善によりて自己の罪を亡すとを得る。而して吾をして之を爲さしむるものは神の恩愛の力である。神の恩愛によりて惡に克ち得るといふ信仰は吾人の毫も疑はぬ所である。果して然らば、假令吾に猶未だ至らざる處あるにもせよ、吾人の善が世の惡を亡さずしては已まざるといふ確信を世上に表明するのは即ち吾人の責任ではないか。古の儒者は治亂興廢はあざなへる繩の如し、榮枯盛衰は浮世の常なりとした、吾人の確信は之ではない。神が天地に充滿して居るといふ確信と神が終に勝つといふ望とは、實に吾人が大問題を一刀の下に解決するの鍵鑰である。吾人固より甚だ不肖である。けれども今より修業を始めて怠らざらば、一代にしては成効を見るべからざるも、二代三代を經たるの後國民の行動を以て眞理の全徳を證明するとを得るであらう、事茲に到らずんば未だ以て吾人の使命は完うせられたりといふを得ぬのである。

附錄

大哲フイヒテー

彼の幼時

フイヒテーは千七百六十二年五月十九日獨乙の上ラウシッツの一小僻色ラメナウに生れた。夫れ國家の將に勃興せんとするや、其前に於て精神界にも偉大なる人傑が起つて、國家の精神を鼓吹し其思想を啓發するあるを見る。フイヒテーの生れた時は未だ獨乙帝國の成立せざりし時であつた、十九世紀に於て一種の特色を以て世界の表に屈起したゼルマン民族の精神は、先づ十八世紀思想界の人傑に發現し、カントを始めとして、シエリング、ヘルバルト、ヘーゲル等の大哲學者より、詩人にはゲーテ、シルレル、宗教界にはシユライ

エルマヘル、ヘルデル、ヤコビ、ハマン等踵を接して起り、實に燦として北歐の天地を照してあつた。フイヒテーも亦其一人である。

フイヒテーの父は元オーガスタス、アドルフアスの軍に從つた敬虔忠直なる一兵士のゼルマンに止まりて家居せしものゝ裔であつて、代々機織を業とし、家甚だ貧しくあつたが、堅忍不拔事を處するに直く、行を立つるに正しいのはフイヒテー家の特色であつた。母なりし人は父フイヒテーが忠實に務め事へた機織業師の娘にて。フイヒテーが其の素質をこゝに得しもの又少くはなかつた。フイヒテー幼にして頗る天才あり、且學問の道にもまた敏くあつたが、群兒と嬉戯することをば喜ばず、ひとり山野を跋渉して、天然の風光に接するを樂とした、彼れ天地に附仰して時の移るをも知らず、星を戴き月を蹈んで家に歸りしことしば〳〵であつたといふ。彼が家にあつて授かつた書は聖書と信仰問答との二書に過ぎなかつたが、彼は

意志の強大なる一例

之を反覆熟讀して其意義に通曉し、家族の祈禱會に於ては擇ばれて司會者となり、聖書を誦し祈禱を捧げたといふ。父が其子の將來に於て宗教家たるであらうと豫想したのも尤もである。

曾て其父一の小説を購ふてフィヒテーに與へたが、彼れ大に喜び愛讀措かず、爲めに其の務むべき學業等を怠り、始めて譴責を受くるに至りた。已にして彼れ翻然として悟つて謂く、吾れ誤まつた、「右の眼なんぢを罪に陷さば抉出して之をすてよ、蓋五體の一を失ふは全身を亡ぼすに優れり」と聖書にあるは正に此處だと、意を決して之を放擲せんとて書を携へて近所の川邊に赴いた、が幾度か投ぜんとして投ずることが出來ず、岸頭に立つて躊躇すること多時、愛を割いて遂に之を投ずれば、打ち入る水に聲あれども、流無心にして之を運び去つた。フィヒテーは之を見送つて清き眼に催し來る涙をハラ〳〵と流して居た折しも、父はこゝに來かゝりて此さまを見て、何事ぞと問うた、フィヒテーは恐慄して明白に答ふること出來なかつたから、父はフィヒテーの心事を十分に解することを得て、己が購ひ與へし書を失つたのを大に怒り、彼を叱責した。これ實に彼が一生を通じて世人に誤解せられた始てある。さてフィヒテーは父の嚴しき叱責に遭ひて敢て之を辯護することもしなかつた、彼れは其心事の最も潔かつたときに於て、最も多くの困苦を嘗めたのである。後日に至り父の怒解け再び一書をフィヒテーに與へた時、彼れ敎然として、「父上よ兒はかゝる書を再び手にせざるの決心をなしました、願くは之を他の小兒に與へられよ」といひて、遂に之をうけなかつた。

嗚呼世上滔々たる青年、酒の害を經驗して之を廢することを能はず、小説の學業に及ぼす損失を知つて之を棄つる能はざるもの幾許か、遂にこの一小兒の意志に及ばないのか。人もし基督敎の現はれたる意志的方面を見やうとせばフィヒテーに來りて之を學び給へ。